慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	国際秩序の変化過程に於ける発展途上国の都市化と近代化 : 東南アジア諸国の事例 : 国際関係の社会学の見地から
Sub Title	The Third World urbanization and modernization in relation to the changing world order : a case of South East Asian countries
Author	矢崎, 武夫(Yazaki, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1981
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.54, No.6 (1981. 6) ,p.231- 309
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	米山桂三先生追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19810615-0231

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

国際秩序の変化過程に於ける発展途上国の都市化と近代化

——東南アジア諸国の事例—国際関係の社会学の見地から——

矢崎武夫

Ⅰ はしがき
Ⅱ 土着の都市化—原初的都市化から系統発生的変容都市へ
Ⅲ 植民地的都市化—二次的都市化から異種混合的変容都市及び寄生都市へ
Ⅳ 脱植民地的都市化—異種混合的変容都市から系統発生的変容都市へ、寄生都市から産出都市へ
1 全体社会構造の変化とプライメイト・シティ
2 プライメイト・シティの地域構造と都市問題及び都市計画
(1) 都市の地域構造と商工業
(2) 居住地の構造、問題、計画
Ⅴ あとがき

Ⅰ はしがき

一九七六年カナダのバンクーバーで開催された国連の〝人間の居住に関する会議〟は、先進工業国との関連に於て発展途上国の都市及び農村の人間の基礎的なニードと社会的環境が現在如何に差し迫つた問題を生じ、その解決を迫られているか

を議した意味で重要な会議であつた。

現代世界諸国の都市も農村も、世界的規模に於ける政治、経済、社会的相互関連の網をなして構成され、世界の何れの国の問題も他の国と密接に関連している。従つて会議は国連憲章の原則に従つて、国際協力を強化し、平等と正義と連帯の精神を以て世界の問題を解決するための世界共同体(World Community)の創造に努力することを世界諸国に求めている。(1)

人間の尊厳の問題にかかわる、人間の基本的なニードとアスピレイションを充足する困難は現在ますます増大している。特に発展途上国の人間居住の状況は其の国内の問題であると共に、国際的には発展途上国が国際レベルに於ける諸国の相互関係が作り出す諸国間の分業の体系の中で、西欧を統合中心とする先進工業国の支配的な位置と発展途上国の従属的な位置とに関係した問題である。

一九世紀以来現在の世界では現在発展途上国と言われる国々は西欧先進工業国の繁栄を支える影の部分をなしていたが、今や此等の国々は世界の$\frac{2}{3}$以上の人口を占める国となり、先進国より早い速度で人口を増加し、世界に於ける人口の割合を大きくし、発展途上国が困窮した多数の人口をかゝえ社会不安を増大することは、人道的立場のみならず、国際的緊張を生じ密接な相互関係にある先進諸国にとつても其の発展を計ることは不可欠であるとの認識が強まつてきた。

アブルゴッド及びヘイ(Janet Abu-Lughod & Richard Hay Jr.)によるまでもなく人間の最も早期の都市帝国は西欧ではなく、現在後進的と考えられているパキスタンのインダス渓谷、中国の黄河、エジプトのナイル、メソポタミヤ河岸であつて、北ヨーロッパが世界の統合中心の位置をしめ、他を周辺として従属的な立場に位置せしめたのは一六世紀以後になつてはじまつたことであつた。

此処に逆転が起きたのは一六世紀以降にヨーロッパに科学や技術や資本主義的経済組織、近代社会システムが内的に発達し、その政治経済力をもつて、多くは植民地として其の支配下の国家の資源や労働力を自由に用い得たからである。もとの

植民地、現在の発展途上国から資源がヨーロッパに向けて流出し、ヨーロッパの製品を植民地或は途上国の市場に出すことが出来たことは、ヨーロッパの政治経済的成長の不可欠の要因であつた[2]ことは東南アジア諸国の例をみても事実として認めざるを得ないであろう。

現在の途上国は先進工業国に比して明かに貧困であつて、人々は基本的なニードを満たし得ない状況にあるが、其の理由を途上国の社会文化構造の特性や人々が其の状況を改善せんとする意志の不足のみに求めることは、社会変化の歴史的過程や現在の国際的な分業体系に於ける此等の国の地位の認識をなおざりにしていることであつて妥当ではない。

現在の発展途上国が工業化を進めるためには、先進資本主義国が其の発展過程で行つたように自己の発展のために利用し得る外国はもはや無いから、先進資本主義と同じ型で工業化を進めることはできない。途上国は戦後の脱植民地後も、政治経済社会的に劣つた地位を脱却することは容易ではない。途上国の発展には自らの資本の蓄積、先進国よりの誘致及び技術の導入を必要とし、資本の節約・雇用の増加には先進国の省力型の技術の導入より労働集約型産業の発達、農業技術及び組織の改善を必要とする。

発展途上国の工業化、近代化、都市化の説明に、文化の相対性の立場からの複数路線の社会進化論に学ぶべきものは多いが[3]、先進工業国の段階に達する不可避な進化の過程であるとする単一路線の進化論[4]、或は途上国の文化的特質に其の原因を帰することは、部分的に事実に適合することはあるが、この立場のみから論ずることは先進工業国の自己民族中心主義(ethnocentrism)の価値的な立場からの議論であつて客観性に欠け、充分な妥当性をもつたものではない。

国際社会の中に組み込まれた以後の発展途上国の問題の理解のためには、先ず変化する国際秩序と其後に生ずる諸国の分業体系の中に於て、途上国の占める地位の立場から行われなければならない。国家や民族、其の派生体としての都市、農村、産業の社会経済構造を其のよつて立つ国際的な文脈を離れて封鎖的孤立的な実体であるかの如くに扱う研究は、事実の集積

に貢献する面はあるが現実の構造ができあがつている所以を理解するには、其の構造を決定する重要な要因を見失つている。

さて我々の此の研究の焦点は、発展途上国としての東南アジアの都市に先ず合わせているのであるが、国際秩序の歴史的な変動過程との関連に於てみることが必要であり、以下その方法と研究の概要をはしがきとして述べることにする。

東南アジアの各国が国際的には相互に相対的な封鎖的な体制にあつた段階に於て、農業生産力が上昇し、社会の機能の分化が可能となり、政治、宗教、次で経済的な目的をもつてその影響の及ぶ範囲の活動を統合する機関が発達し、印度文明の影響を受けながら先ず土着の聖なる文化を基礎に神権的な王の支配する原初的な帝国の統合中心として、系統発生的変容(Orthogenetic Transformation) 都市が発達した。

此の形態は一世紀の頃から一九世紀に西欧諸国の東南アジアの植民化運動がはじまり侵入を受ける迄続いた。

西欧諸国は植民地に港湾都市を建設して農園や鉱山を開発、支配し、植民帝国への原料供給地或は植民地に於ける製品の販売の拠点として、土着文化と異なつた西欧の経営方式によるビューロクラタイズした大規模な政治、経済的統合機関を集中して植民地の全国の都市機能を独占してプライメイト・シティ（Primate city）を形成した。

かくて此等の機関の中で地位と役割と権力と報酬を得た西欧人による植民地支配がはじまり、異なつた文化的伝統を持つたアジアの他民族たる中国人、印度人も多数流入して、土着の文化を変容し、都市は民族的には複合社会(Plural Society)、文化的には異種混合的変容（Heterogenetic Transformation）の社会に変質した。

西欧先進諸国の此の地に於ける活動は西欧諸国の利益を目的とするものであり、此の国の発展を目的としたものではないから、此のプライメイト・シティは植民地にとつては寄生的(Parastic)な性格を持つものであり、大多数をしめる農民は都市と全く異なつた文化的伝統の中で低い経済生活を営んでいるに止つて、植民地全体は社会経済文化的に異なつた二重構造をなしていた。このことは東南アジア諸国を西欧諸国に従属的に依存させその自律的発展を抑圧したことになつた。

第二次世界大戦後植民帝国は崩壊し、植民地諸国は独立国となつたが、世界資本主義の秩序体系の中に遅れて登場した国として、植民的な伝統を引き継いで先進国に対しては従属的な地位に立つ運命を担わなければならなかつた。

独立国として国家民族全体の社会経済的発展を計るにはプライメイト・シティを寄生的なものから産出的（Genetic）なものに変化させる必要があつたし、複合社会の状態を脱して統一ある秩序体系を作るには民族主義の運動を要し、植民地時代の異種混合的変容の都市を土着文化を基盤とする系統発生的変容の都市に変じて、此れを基礎に都市は、土着人による官僚統制の中枢、金融経済の指令部、主要な教育、文化等の統合機関の位置とし、国民的一致の中核としての役割を担うことが必要であつた。

植民地的伝統からの脱却を計つて、首都の移転も考えられたが、此処には国家的統合中心としての諸機関や国際的、国内的な交通通信網が整備されており、国際社会の一員としての近代国家となるには此の他に代るべき地がなかつたから、此処は独立後も国の首都となつたが、それだけ植民地的伝統は残り、プライメイト・シティたるの性格を強めることになつた。

首都の複合社会の性格や支配層としての都市エリート層の植民地時代の価値的伝統を引継ぎ、また、先進国の活動と結びついて利益を獲得し一般大衆との貧富の差を拡大し、此等支配層と貧困な都市大衆と農村の二重性は脱却し得ず、全国の統一ある秩序の確立に困難がある。戦後の医療の改善による都市農村に亙る人口の自然増、また都市に於ける土着資本、教育施設、技術の不足、外国資本の誘致の困難な中で、工業化の進まない都市に大量の貧困な農村人口が流入した。此等の都市は西欧都市の発展時より早い速度で爆発的に拡大している。都市的施設も整つていないところに急激な都市人口の増大があり、失業、低賃金、スラム、スクワッターが大量発生し、社会解体が起り過剰都市化（Over urbanization）の現象を生じ、社会秩序の維持を困難にした。此の過程で先進国と発展途上国との間の格差は増大し南北問題として先進国と発展途上国との関係を悪化した。

此等の国では紆余曲折を経ながら政治秩序の確立、資本の蓄積、外国資本の誘致、農業構造や技術の改善、家族計画の浸透を通して問題の克服に努力しているが其の進み方は遅い、しかし工業化を進め得たものとしてシンガポール、香港の二つの都市があげられる。此等の都市は系統発生的ではなく異種混合都市であるが強い政治的統制力を用いて秩序を維持し、有利な条件を提供して外国資本の誘致及び比較的高い教育程度を利して技術導入に成功して、国家及び都市計画を着実に進め、都市は産出都市化し、一人当りＧＤＰ（国内総生産）を急速に増大し、階層間の所得格差を縮少して、過剰都市化の状況を克服してきている。しかし此等は農民を有せず、殆ど単一民族からなる人口の少ない島国都市であることが重要な条件となつている。

国民の大多数をしめる貧窮した農民をかかえた他の諸国は、植民地の伝統を引きついで、先進工業国を統合中心とする一定の一次産業への特化の傾向を脱し得ず、資源を枯渇し、多数を占める農民は搾取的状況にあり、先進国の経済協力や技術援助もあるが農業への投資、技術の発達は不充分で進歩は遅く、家族計画を進めているが、その効果が現われるには長期を要する一方、人口はこれを上廻つて急速に増加し、困窮の状況の改善の道のりは遠い。此処では農村人口の都市への溢出もあるので、農村問題の解決なしに都市問題の解決は不可能であり、各国の状況に応じた先進国のより積極的な経済協力、技術援助、文化交流を通じての国際関係の相互依存のあり方の変化は、発展途上国の今後に重大な関係があるのみでなく、国際秩序に大きく影響する。

此等の国家社会に於ける人間の尊厳の問題は、国連の人間居住に関する会議の原則の宣言で述べているように、平等と正義と連帯の精神に基づき世界共同体を強化し、政治、金融、経済、技術社会の綜合的な緊急対策と長期の計画を樹立して、その実現には世界諸国特に先進工業諸国が率先して共同の責任を負うべき問題となつている。

Ⅱ 土着の都市化

―原始的都市化から系統発生的変容都市へ―

一八世紀以前の伝統的な東南アジア諸国では、諸王国の大多数の住民は農民であつたが、都市の存在しなかつたフィリッピンのような島諸的な部分を除いて、ジャバや東南アジア本土では中国文明の影響もあつたが、土着のエリート層は印度文明と接触して、農村とは異なつた生活様式を発展していた。村の生産力の上昇につれて村民の機能的分化が進み印度の僧侶の指導の下に村の長は神権的な王に、部族の兵士は訓練された軍人に、村の優れた人間は官僚に、聖なる森林は寺院の複合体に変化して新たな形態の統合を生んでいつた。(5) かくて、伝統的な民俗社会は都市社会となり、土着文化は文明に昇化されていつた。此の様な地域は政治、宗教、芸術の機関を有する統合中心としての都市であり、神権的な王の位置であり、現われんとする文明の容器であつた。

此の非生産的な集団が扶養されるには農業生産力の上昇と交通技術の発展が必要であつたが、此等の都市は其の存在を保証する為に交易からの利益と農村の余剰生産と労働力に依存していた。

此の都市は地理的位置から二つの型の都市即ち〝聖なる都市〟と〝治岸都市〟とに機能的に分化した。此等の都市は共に神権的な王の位置として共通の起源を有していたが、其の機能、文化的役割及び地域構造に於ては相異があつた。

東南アジアの最初の都市は沿岸都市であつて一世紀から東南アジアの本土から島諸地域にわたつて発生した。此等の都市の王は陸地と共に海上を支配し、都市市場や港への課税、自ら交易を行つての利益、海賊行為や奴隷や土地の商品の売買を行つて自らの支配力を維持していた。此の活動は、周辺地域のみでなく、広く諸外国にも及び、外国人の流入するものも多く、異なつた宗教、言語、慣習も伝播され、(6) 此の都市はレッドフィールド及びシンガー（R. Redfield and M. B. Singer）の

言う新しい精神的社会的統合の過程にある異種混合的変容（Heterogenetic transformotion）の都市であつた。[7]

この都市は、石の建物が多く整然と計画された聖なる都市に比較すれば、素朴で、建物は木造であり、雑然としたものであつた。ただ宮殿の周辺は印度の宇宙哲学の影響を受けており、廷臣と他の住民とが区分され、外国人が別のコミュニティを形成していた。此の都市では宮廷のエリートが商業を行い、商人等の集団の影響力は聖なる都市より遙かに強かつた。沿岸都市は後背地が限られていたので都市として大きく成長することはなかつた。[8]

聖なる都市は沿岸都市と異なつて外洋から自らを隔絶して、全体としての領土を守り、行政的に支配し得るジャバや東南アジア本土の内陸に位置していた。此の都市は多くの記念碑的な建築物を有し、また広い支配圏を有して、沿岸都市より遙かに立派なものであつた。此処は王の支配する農業王国の宗教、社会及び行政的機関の中心であつて、都市の繁栄は王の支配下にある農村よりの農業生産物の上納、公役、軍務への服務等に依存していた。[9]

レッドフィールドとシンガーの用語によれば、聖なる都市は民俗社会を母胎として農村の余剰生産と労働力を基礎とした原初的な都市化（Primary urbanization）の過程で、外国からの文化伝播に結合して王、官僚、知識層によつて計画された最初の都市として系統発生的変容（Orthogenetic transfurmation）の都市であつた。此れは局地の文化に内包された小なる伝統（Little tradition）が明確に組織化された大なる伝統（Great tradition）に変容することによつて生じたものであり、[10] 伝統的な宗教的道徳的規範が支配的であつて、技術的秩序がもたらす変化はこれによつて中和され、外国との交易による市場があつても伝統的文化が変質することは無かつた。

此の都市は経済的現象であるよりも、政治宗教的現象であつて、王の政治的権威と権力行使の正当性を象徴するものであり、文明及びイデオロギーを創造する場であつた。此処では交易や生産の活動は規模の如何に拘らず、行政、宗教の主要な機関の統制を受け、大なる伝統を象徴する都市は王国の行政的、儀式的中心として機能していた。聖なる都市は王国が支配

する都市を中心に政治、社会、経済的範囲に亙つて農民に文化の整一な理解をすすめ伝播するようにしくまれていた。

かくて象徴的或は物質的な結合によつて、大なる伝統の都市と従来孤立的であつた小なる伝統をもつた多数の農村は都市を中核として結びつけられ、農民は国家の活動に参加することを通じて領土を有するものとしての王国に属する意識を強めてゆくことになつた。

神権的な王の住むこの都市は社会に関する宇宙哲学的な信仰のイメージによつて計画され建設された。都市の主要な要素は寺院、王の宮殿、都市の城壁と堀であり、此れは天を再現するように計画されていた。宮殿と主な寺院は都市の中心に位置し、此の周辺に知識層や官僚の住居があつた。此れをかこんで職人、製造業者、宝石商、武器製造業者が居住し、これらは城壁によつて囲まれていた。外国商人は城壁外にコミュニティをなして居り貧民も外側に位置した。全体の構造は権力と社会階層に従つて中心は高く周辺程低いという型をなしていた。(11)

沿岸都市と聖なる都市は其の構造や機能に相違があると共に共通の面があつた。

沿岸都市も聖なる都市も交易の盛衰、領土を拡大する目的で行われた戦争や吉凶を占う迷信のため都市の位置を移動することは屢々あつた。しかし都市が権力の中心であり、王国の統合の中心であることには変りなく、西欧諸国が此等の国を植民地としてその支配下に置くまで此等の都市は王国の政治宗教及び経済的統合中心として機能していた。

Ⅲ　植民地的都市化

―二次的都市化から異種混合的変容の都市、寄生都市へ―

東南アジア諸国の植民地化は一六世紀初頭ポルトガルによるマラッカの占領にはじまり、次でスペイン、イギリス、オランダ、他のヨーロッパ諸国の進出もあつたが、当時は未だ植民地化の萌芽的な状態で東南アジア全体の構造が著しい変貌を

とげるには至つていなかつた。西欧諸国が進出し、東南アジア諸国を植民地化して政治、経済、文化の凡ゆる面に亙つて著しい変化が生じたのは一九世紀に入つてからであつた。

西欧では一九世紀には農業、輸送、製造の技術的革命の時代が到来し、大規模な貿易が起り、西欧都市は圧倒的に経済機能優越の都市に変化した。急速に工業化を進めた西欧諸国は西印度が資源の獲得、市場の拡大に充分でなかつたから、東南アジア諸国を植民化の目標とした。当時西欧諸国はアジア諸国に比して商業活動に於ても、海軍力に於ても優位に立つていたから、アジア諸国の海岸に交易の拠点を作り、施設を整えて都市とし、此等を西欧のアジア諸国との接触、其の植民地化、西欧化或は近代化の窓口とした。二〇世紀の初頭までにフランス、イギリス、オランダ、アメリカによつて東南アジアの植民地としての分割を終り、タイのみが独立を保つたが実質的に西欧の指導下にあつた。

此等の都市が西欧化した都市として発展するのは、西欧諸国が東南アジア諸国の植民地化に成功し、土地が欧州の企業に安く売られ、道路、水路、鉄道及び電信電話のコミュニケイションの手段の建設が大規模農業及び工業の発展のため諸国家によつて行われたからである。(12)

かくて船舶、鉄道、大規模農園、鉱山の時代が到来し、此等の港を通じて西欧の多量の資本と経営方式によつて、東南アジアから、西欧に輸出される商品の流れを増大し、港湾の拠点都市は機能と人口とを拡大していつた。此の大都市が機能を拡大し農園や鉱山を開発して支配下に組入れてゆく間に、地方中心の交通や運輸及び農業中心及び鉱山に集落ができ、此等は植民地の行政的、経済的統制に役立つた。

此の港湾都市はアジア的伝統文化に基づく系統発生的都市とは対遮的に伝統的文化の位置から離れ、西欧の行政家や企業家支配により、レッドフィールド及びシンガーによれば、異なつた文化的起源を有する異種混合的変容（Heterogenetic transformation）の港湾都市であつた。(13) 西欧との交通の便があり、鉱山や農園に近接性を有する河口や沿岸で、吃水深く大

型船の出入が自由なところが此の種の都市に好適な位置であつた。

イギリスによつて建設されたシンガポールは東西を結ぶ海路の焦点にあり、東南アジア最大の港として、マレー半島西岸の錫やゴム、其他東南アジア諸群島の集散地として最適であつた。オランダ支配下のバタビヤ(現在のジャカルタ)はジャバ、スマトラ全体のタバコ、砂糖、コーヒー、茶、ゴム、コショウの輸出港として、また、先ずスペイン、後にアメリカの支配下にあつたマニラは中国、日本、東南アジアへの主要航路に通じ、フィリッピン全体のタバコ、砂糖、コプラ等の集散地として適地であつた。更にイギリス統治下のラングーン、独立国ではあるが半ば植民地的状態にあつたバンコックはタイの米、フランスの植民地サイゴンは仏印の米及びゴム、イギリスの植民地香港は生産的な大陸を背景として、茶、絹、砂糖等の集散地であり、自然の良港として外国貿易を行う港湾都市であつた。(14)

此等の港湾都市の発展は内部に機械化した交通路を開発し、此等に沿つて輸出のための商業的生産を発展できるようになつてはじめて可能であつた。此の状況に対応して此等港湾都市は西欧商品の輸入市場ともなり、業務に必要な各種サービスも入つて来て貿易のため施設の整つた港湾都市となつていつた。

西欧企業の進出の結果として拡大し、機械化した輸送網は、此等港湾都市を焦点として集中し、植民地の新しい行政、経済、教育、宗教其他の統合機関が集中し、より小なる都市の成長を抑圧して、機関は夫々の規模を拡大し数を増加した。此等の機関に地位を占め役割を果たし報酬を得て生活する人口及び、此等の機関に間接的に結びつく機関及び人口が集中し、此等の都市は国全体の多くの都市的機能を実質的に独占し、大規模化して、各国に於て次位の規模の都市より遙かに大きく、ジェファソン (Mark Jefferson) の言うプライメイト・シティ (Primate city) となつた。(15)

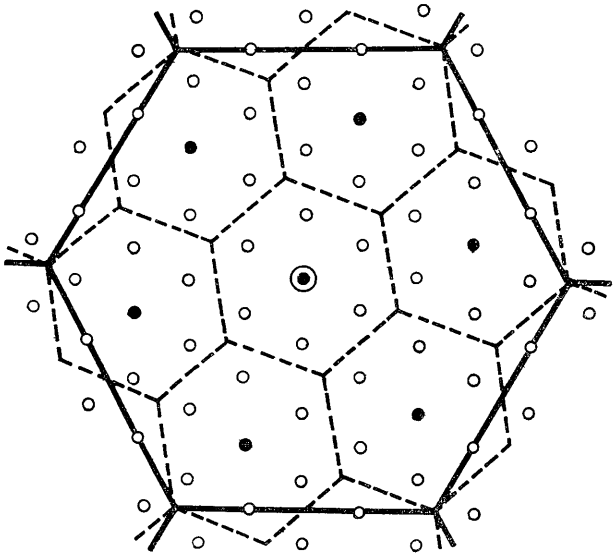
ジェファソンがプライメイト・シティに注目した理由は、国の都市分布の形態は多くの先進工業国では一般に規模順位の規則性 (rank and size rule) によつて都市が分布しているのに対し、発展途上国に於てはしばしば首位の都市は二位以下の

表1　中心地の階層別による数，規模，距離およびサービスの予想パターン

中心地の規模	中心地の数	中心地間の距離	中心地のサービス地域の面積	中心地のサービス地域の平均人口	商品とサービスの型の数
1,000	486	4.0km	44km²	3,500	40
2,000	162	6.9	133	11,000	90
4,000	54	12.0	400	35,000	180
10,000	18	20.7	1,200	100,000	330
30,000	6	36.0	3,600	350,000	600
100,000	2	62.1	10,800	1,000,000	1,000
500,000	1	108.0	32,400	3,500,000	2,000

アモス・ホーリー著，矢崎武夫監訳，都市社会の人間生態学，時潮社，昭55年，P276.

図1　中心地の階層組織図



アモス・ホーリー著，矢崎武夫監訳，都市社会の人間生態学，時潮社，昭55年，P277.

都市に比して圧倒的に大きいという事実である。

先進国に於ける規模順位の規則性による都市分布の形態を明かにしたのはクリスタラー（Walter Christaller）である。[16]

クリスタラーによると、表1に示すように、先進工業国に於ける中心地の人口規模と中心地の数、中心地間の距離、中心地のサービス供給面積、サービス供給面積内の平均人口、商品とサービスの型の数との間には一定の規則性がある。即ち中心地の規模が大きい程、中心地の数は少く、中心地間の距離は遠く、中心地サービス供給の面積は広く、サービス供給の平均人口は大きく、商品とサービスの型の数は多いという関係を見出した。先進工業国に於ては都市的中心は数的側面からいつても機能的側面からいつても、逐次的な規模順位の規則性による分布を示し、都市的サービスは末端にまでゆきわたつて、全体として都市化が進んでいることを示している。

ヨーロッパでは二万以上の人口の地域は一九二〇年総人口の三二%、一九六〇年四一%、北アメリカは夫々三八%、五七%であつて高度に都市化しているが、南アジアは一九二〇年六%、一九六〇年一四%でアフリカの夫々五%、一三%と共に都市化の最も遅れた地域である。[17]

しかるに東南アジアでは各国の首位の都市は当時数十万をこす巨大都市であるが次位の都市との差は著しく、一九五五年サイゴン―コロンは次位の都市ヒユの一六・三倍でありバンコックは次位の一五倍、マニラは九倍、ジャカルタは二倍、[18]マレー全体からみたシンガポールも次位と数倍の開きがあつた。

かくて東南アジアに於ては先進工業国とは異なつて、全体の都市化の程度は極めて低く、都市的機能力が極端に此等プライメイト・シティに集中し、都市化の影響が他に及ばず、国全体としてはプライメイト・シティと大多数をなす農村的な小都市を含む農村地域に両分された二重構造をなしていた。

さて此のプライメイト・シティとしての此等港湾都市の媒介を通じて、東南アジア諸国に西欧文化が伝播され、世界経済

秩序の中に組入れられて、西欧化、近代化が進んで、東南アジア諸国の伝統的秩序は解体しはじめた。輸送物資の大量化は大型船舶を要するようになつたから、旧来の沿岸都市は消滅或は衰微した。他方西欧支配の港湾都市は各国の植民地支配の中心として成長していつた。そして植民地支配の終る迄には、各国に於て、圧倒的に大きい都市は西欧諸国が建設し発展した港湾都市即ち、プライメイト・シティであつた。

バンコックは一九世紀に西欧諸国の勢力が侵入する前に宮廷がビルマとの戦に敗れて避難した場所として首都となつたが、此の期にはタイのプライメイト・シティとして他を抜んでた大都市となり、全国支配の中核への成長は西欧の指導下に都市が建設され西欧の企業家の国際活動の拠点となつたことによつてはじまつた。

マニラは一六世紀後半スペインが来航するまでアラビヤ人、中国人による対中貿易港であつたが、スペインの統治下でフィリッピンの首都となり、優れたマニラ港は対アジア及び対欧貿易に適し、一八九八年アメリカが征服するまでにフィリッピンに於ける唯一の都市即ちプライメイト・シティとなつた。マニラを中心とする一〇〇マイルの地域にフィリッピン人口の半ばが居住し、行政中心に適し、貿易港としても発展した。独立後は衛星都市クエゾンが首都となつたが、マニラは政治、経済の中心としての機能をますます強め拡大し実質的に首都としての役割を果している。

インドネシヤでは独立時にジャカルタ、スラバヤ、スマランが主なる都市であり、此等は西欧が先ず要塞と保護された貿易港を建設するまでは小部落に過ぎなかつたが重商主義の影響で都市として発展してきた。更にラングーン、シンガポール、サイゴン、ハイフォン―ハノイ、香港等の小国のプライメイト・シティも西欧の建設によるものであつて、西欧諸国の外国貿易を積極的に開始することによつて港湾都市として発展した。

交通、通信は此処を中心に発展しているのみでなく、各植民諸国の土着の指導層は西欧の影響を強く受けており、国家の建設、経済の発展は西欧人の指導下で行われたから、此の地は新しいアジアを創造する地となつた。此等の都市には数的に

はアジア人が多いが、西欧人は優越的な地位を保持し、強い影響を与え、人口の殆どが中国人であるシンガポール、香港は言う迄も無いが、バンコック、マニラでも中国人は西欧人についで経済的活動に優位をしめ、ラングーンは多数の印度人が集中して経済の分野で強力であり、これと異なつた土着の文化を持つた人達とは、民族的には複合社会（Plural society）となり、文化的には異種混合的変容（Heterogenetic transformation）の都市となつた。

此等の複合都市或は異種混合的変容都市は植民地としての各国の国家的統一の統合的中心として、また、海外貿易を通じて、東南アジアと西欧が接触する地点として新しい役割を担うにいたつている。

此等の都市は植民地、半植民地国家としての中央官僚機関の位置であり、全国の政治経済的管理や、国家や地方計画を行う中枢である。官僚機関は西欧人が指揮、指導に当つており、国家社会の西欧化、近代化に重要な役割を果していた。また此等の都市は各々の国の貿易、金融、輸送、保険、資本市場を独占し、此等の西欧人が所有し運営している機関は官僚機関と共に全国の統合機能の中核をなしていた。

此等の都市は長距離輸送機関、道路や水路の出発点として広大な地域と結びついている。多くの西欧から導入された技術や大学教育の中心、国家的規模の新聞社の位置であり、また民族主義思想が形成され、伝播される中核でもあつた。

此等機関の多くは近代に入つて西欧諸国に起つたもので、その移植であつたが、東南アジアに於ては効率の良いものであつたから、西欧諸国は此等に投資して利益を獲得し、また所期の社会的目的を達するに有利であつた。

しかしこのことは西欧的な行政や経営の方式が此の地に存在した凡てのものを払拭して、これに代つていつたことを意味するのではない。以前からの夫々の方法で経営を行つている中国人、印度人等の小売に於ける活動や、農業や鉱業への参加活動も無視することはできない。中国人は印度支那やタイに於て精米業を独占していたし、また西欧の輸入業者にとつて市場の状況に精通する仲買人として重要な役割を担つていた。

ギャーツ（Clifford Geertz）によれば西欧型の会社経済（Firm economy）では商業や製造業が資本集約的であつて、一組の非人格的に定義された制度によつて運用され、それは能率をあげ人員を削減し経費を節約するために生産や分配活動を行う分業が高度化し専門化した職業を構成している。

しかし東南アジアの様に資本が不足し多数の人口をかかえた都市では、大多数の人口が第三次産業に従事しており、収入は少なくても雇用の可能性の多い産業が一般化しバザール経済（Bazzar economy）の形をとる。此の経済は労働集約的であつて、その場限りの取引を数多く行う競争的な商人の各個独立な活動によつて成立つているのであつて西欧型とは著しく異なつている。[19] ともかく此の都市ではウェルトハイム（W. F. Wertheim）の言う分ち合われた貧困（shared poverty）[20]の状態が一般的になつているのであつて、社会の基礎的な条件が変らない限り、人々の活動の形態は容易に変化しない。

このような伝統的な経済活動の型が存在する一方、植民地の行政と経済機関が開拓していつた範囲に於て、伝統的秩序と軋轢を生みながら、中央から新しい統合秩序ができ上り、そこでは人間の関係は技術的秩序、新しい行政的規制、経済及び技術的便宜に関連するものとなつて、西欧化或は近代化と言われる方向に進んでゆく側面も現れてきた。

従つて都市は異なつた文化的伝統の間の軋轢を生ずる場所であり、伝統が解体して、人々が根無し草となり、アノミーの社会を現出してゆく場でもあつた。

プライメイト・シティで、被支配層が新たに直面しなければならない問題は、被支配層にとつて外国人である西欧人の行政家や政府の新しい行政の方法、或は西欧人を主とする外国人の実業家や企業による生産の西欧的な個人主義的理念に基づく合理的組成、経済合理的な市場や売手や買手の組織の問題であつて、伝統的な土着の文化や組織との矛盾を如何に克服してゆくかの問題であつた。

此の都市は土着の文化の創つた都市とは位置的に異なつた港湾に新たに建設され、植民地化の過程で異種の文化と接触す

ることによつて生ずる此の都市化の過程は、レッドフィールドやシンガーによれば原初都市化（Primary urbanization）に対し二次的都市化（Secondary urbanization）と言われるべきものである。[21] 西欧文化の培つてきた西欧のための経済成長の方法と、これを可能にする政治権力の拡大が土着の伝統的文化に優先し、全体を新たな構造に変化してゆくことになつた。

二次的都市化にあつてはコンセンサスは技術的秩序に見出され、金銭的打算による自己利益に基づくものとなり、人々は原初都市化の人格的統制に代つて、西欧社会では既に一般化していた非人格的統制に従うようになつた。また系統発生的変容の都市に見られる複雑に相互関連し封鎖的固定的な地位と役割の体系に代り、此処では共同の関心及び感情によつて結合した大なる集団が形成され、ローカルな宗教の普遍性をもつた宗教への改革が叫ばれ、ローカルな集団をこえた人間結合による階級意識が形成された。此の様な一般的状況の変化につれて、都市に基盤をもち西欧式の教育を受けたエリート層は系統発生的思想に基づいて、西欧の植民地支配からの解放を求めて民族主義を叫ぶが、此等の都市人と大多数をなす農民とは同一の文化的経済的基礎に立つてはいないから両者の間にギャップがあつた。

西欧化、近代化は此等プライメイト・シティや、これと発達した交通通信機関で結ばれることによつて近接性を有し、開発された周辺地域に次第に浸透したが、アフリカや中国に次で世界の都市化に遅れた東南アジアでは此等プライメイト・シティから離れた土地に居住し全国民の大多数をなす農民は小なる伝統の中に止まつて、多数の外国人が居住し西欧化近代化しつつある都市とは文化的経済的に異質の存在であつた。

植民時代の東南アジアの二次的都市化の社会では都市と農村の間に共通の文化的意識に欠け、文化の二重性があるから、全体の統合は共同の文化に依存出来ない。プライメイト・シティは農村との間に相異があるが、政治的にはある程度全体の統合的中心となり、またサービス娯楽を供給し、自給性の強い農村は都市に対し原料、食料の供給地である。此の意味で相互の関係は文化によつて規定されると言うより、相互依存性或は共棲的関係が基礎となつていた。

東南アジアの人々は、元来外国人によつて建設された港を中心として、新しい国家構造が現出し、これを通じて、近代化した外部の世界としての西欧に結合して、内部に軋轢を含みながら変化していつた。

東南アジアに於て西欧諸国が母国の新しい技術を導入することによつて行つた経済活動は、当然都市内及び多くの面で此れと結びついた生産地域の経済発展に限られていたが、ホゼリッツ（B. F. Hozelitz）によればマレイやフィリッピンでは輸出用の商品穀物生産の増加の結果、食用穀物生産の相対的不足を生じ、輸出する生産物は西欧の市場価格に依存する不安定なものであつた。西欧の進出は自然資源を枯渇させ、農民や其他の第一次産品の生産者を搾取することによつて、国全体の経済の停滞と衰亡をもたらす結果となつた。更に西欧諸国によつて達成された政治秩序の相対的安定と医療の進歩、導入は農民人口を増大し、この人口圧力は農民を困難に陥れた。

古い土着の支配層が其の権力を失つている状況下で植民地の貿易を独占しようとする西欧人の願望は西欧諸国の最大の利益を目的とするものであつて、得た利益を植民地の発展のために投資することはなく、また西欧から輸入された製品は土着の生産者に打撃を与えた。植民帝国による植民地搾取という状況下では、東南アジア諸国夫々の全体からみれば、此等都市はホゼリッツの言う、国家や地域の経済発展に役立つ産出的（Genetic）な都市であるよりも、経済発展に不利を招く寄生的（Parastic）な性格を持つ都市であつた。都市が産出的であるか寄生的であるかは当該都市内及び周辺地域内の経済発展のみに関連して判断さるべきではなくて、当該都市と関連する国家全体或は更にそれより広い地域との関連に於て考えなければならない。[22]

植民地の行政中心としてのプライメイト・シティは政治的及び文化的には植民地内で支配的であり得るが、経済的には植民帝国に従属し、寄生的都市である、政治的独立の首都であつてもバンコックのように植民地首都と類似の地位にあり、世界貿易の中心をなす先進国に従属している場合も同様に寄生的な役割を果たした。

ヨーロッパやアメリカでも都市と農村が統合された一体となつたのは最近のことであり、日本でも此の現象は戦後のことである。先進工業国の場合、都市企業家は農村から原料を購入し、都市の製品を農村を市場として売り捌くし、政府や都市企業家は農村に投資して産業を起し、地方都市が発展し国民経済全体を豊かにするに役立つから都市は産出的となる。

植民地の場合、植民帝国からの企業家の経営による農園や鉱山の産物はプライメイト・シティを通じて植民母国に流出し、農村から産物が買われても低価格であつて農民は貧困に止り、植民帝国からの輸入品を購入する能力は無い。都市と農村は経済的にも文化的にも異質の社会になつてゆく。

プライメイト・シティに関する議論は多々あるが、植民地の状態にあつては基本的にはハウザー（P. M. Hauser）の言うように植民帝国及び植民帝国から来た或は土着の都市エリートに役立とうとするものであり、他の都市の発展を妨げ、経済発達の障碍となる寄生的なものであると言えよう。(23)

植民時代を通じて此等プライメイト・シティは、西欧人によつて欧州及びアメリカの植民母国の大都市との間の輸出入を増大することを通じて規模を拡大し、西欧の大型船や国内の物資を移動する小型船の港湾都市として成長していつた。

此等の都市は、船舶、鉄道の修理や原料の加工を行う若干の工業的活動はあつたが、生産都市であるより、物資の集散を行い植民行政を行う統合機関のある中心であつた。従つて工業の発達にはみるべきものはなく、商業、輸送、貯蔵や行政に携る第三次産業人口が多く、此等機関に直接的或は間接的に関連するために多数の人々が集中したから、人々は雇用の機会に恵まれず、企業の中でも主なる機関に間接的に関連するものは低賃銀で高度に労働集約的な型で運営され、都市は潜在的失業或は失業人口を多く抱えていた。

此の都市には数的には限られているが支配層を形成する西欧人が居り、また中国、印度からの来住者も多かつた。西欧からの文化の流入があると共にアジアの異なつた都市的生活法をもつた人々が多数あつたから、伝統的であり、農村的な土着

人の生活法とは対照をなしていた。此等の都市は異なつた民族や文化と結びついて、階層化された政治、経済、社会地域的な構造をなしていた。

マギー（T. G. McGee）によれば、西欧人は他と明瞭に区分された最高の地位と富とを有する集団を形成しており、港に近く都心を構成する行政、金融、貿易、教育、宗教の機関を所有して知的な業務に携り、西欧諸国の利益を主なる目的として運用している。西欧人は人種的にアジア人と相違すること及び支配者として高い地位と富と生活様式の相違によつて都市の他の居住者と社会的地域的に異なつている。彼等は都心に比較的近く道路や庭園が整い都市内の最も快適な環境に広大な西欧式の家屋を構え、特定な資格を有するもののみ会員たり得るクラブ其他の娯楽施設及び学校、教会を所有し、人々の間に強い紐帯をもつたコミュニティを形成しており、都市の一般大衆の地区とは隔絶した異質の社会をなしている。

多くの都市で最大のアジアの外国人集団を形成する中国人は主として大小の商業に従事し、特に小売活動に優位をしめて経営者となり、また店員、職人、労働者となつていた。彼等は方言集団に分れ、店舗と住居を分離せず、中国人街に荒廃した住宅、快適性の欠除した状態で密集居住して伝統的な家族生活を行い、自身の結社、寺院、学校、娯楽機関をもつて、中国文化を保持している。独立国であつたタイのバンコックでも中国人は全都市人口の$\frac{2}{3}$を占めていた。

英印混合人種は事務に、ヒンドゥ及びモスレムの印度人は小売業、半熟練、不熟練の労働に従事し、自身の文化をもつたコミュニティを作つている。

土着の民族は二つの異なつた集団を形成する。その一つは伝統的な貴族及び西欧式の教育を受けて西欧支配者と協力するもので、此等は土着人の都市上層をなしている。

土着人口の大多数は農業に従事しており、都市居住人口の割合は少なく、都市の土着人口の大多数は店員、職人、ドック建設工事の半熟練、不熟練労働者、或は人力車夫、立売人、行商人或は失業者で主として都市周辺に農村的な状態でばらば

らに最低所得者の商住混合地区をなして居住している。[24]

かくて植民地時代の東南アジア都市は西欧諸国に政治、経済的に従属した型で西欧諸都市と結びついて、植民地諸国を西欧化した形で組織立ててゆく中核をなしていた。植民地支配者はこの意味で植民地諸国が他の方向に向て変化することを好まなかつたが、日本の侵略後、日本が少なくとも表面的にはアジア人の解放を唱えたこともあつて、土着人の都市上層の指導下に系統発生的な文化を基礎にした民族解放運動が起る機縁となつた。国の独立を獲得することによつて、植民地の伝統を持つ異種混合的な都市の文化を変じて、土着文明の形成発展に役立つ、系統発生的な都市にすることが出来るかどうかには問題があつた。

此等の都市では文化を異にした西欧人、中国人、印度人を有し、此等は土着人と社会階層的にも地域構造上も位置を異にし、凝離（segregate）して民族地区を形成し、夫々の政治、経済、社会組織を有し、容易に変化しない。

多くは農村に基礎をもつた土着の人々にとつて都市は外部のものであり、一時的な居所であつて、永く居住せず、国家的な問題や都市の問題に深い関心を示さない。彼等は都市に農村の価値、慣習、態度を持込み、多くは都市であつても農村と同一の枠組で政治的に組織立てられている。

植民地の伝統が作りあげた都市の寄生的な性格、国家統一の不足、都市農村を通じて産業の不充分な発展に由来する多数の民衆の貧困、失業、都市上層と大衆との所得の著しい格差、生活型態の相違、社会政治的不安定等の問題は、植民地諸国の国内の問題であると共に、此等の国が国際社会に置かれた状況との関わり合いの仕方に由来する問題であつた。これはフランク（André Gunder Frank）の言う国際資本主義の中にあつて従属的地位にあつたということである。[25] かく此等の都市も国家も国際社会の派生体として機能しているのであるから、国際社会の関係構造の変化なしには問題の解決も計れないことになつた。

Ⅳ　脱植民地的都市化

―異種混合的変容都市から系統発生的変容都市へ、寄生都市から産出都市へ―

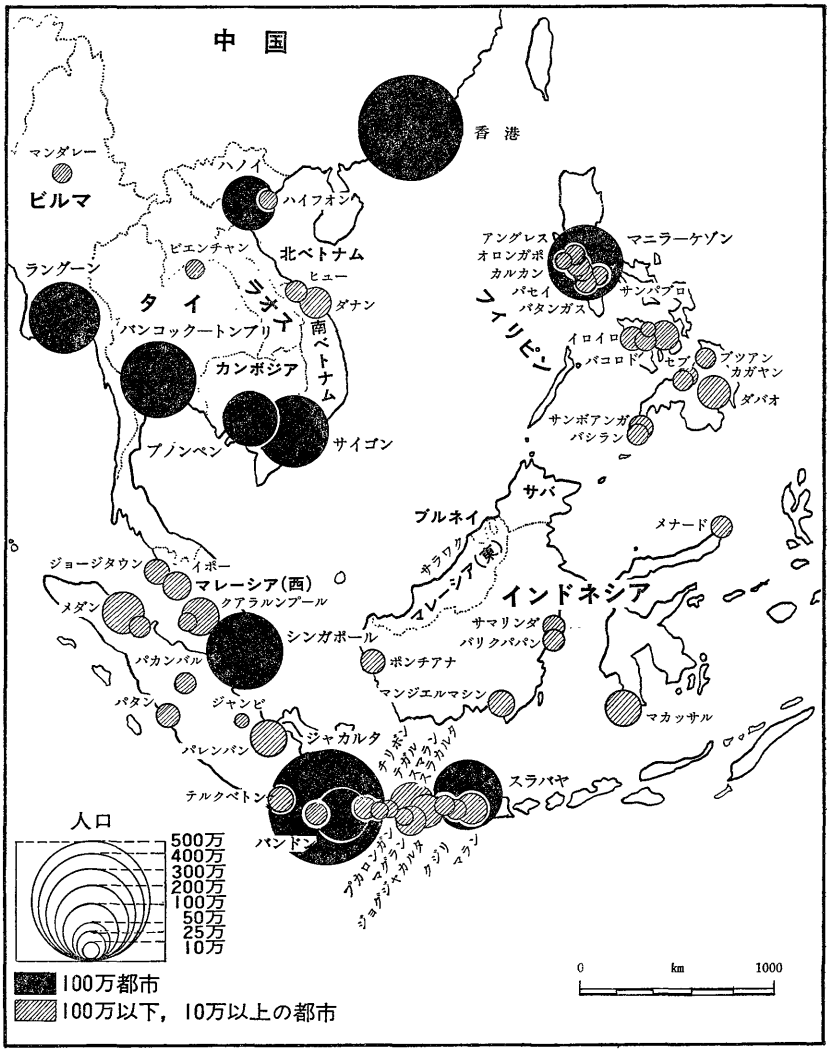
1　全体社会構造の変化とプライメイト・シティ

第二次世界大戦後諸植民帝国は崩壊し、東南アジアが植民地たるの地位を脱却し独立国となると、その社会経済的発展を計る東南アジア諸国は、西欧社会と結合する地であり、政治、経済、社会的に寄生的な役割を演じてきたプライメイト・シティを産出的なものとすることを求めた。また此の都市は複合社会の性格をもち西欧文化と中国文化及び土着文化、異なつた民族、富裕層と貧困層の間に不調和を生み、統一したものとして国家への忠誠を優先することが困難である。更に新しい社会を担う西欧化した都市支配層と、農村文化に基盤をもつ都市下層及び農民との間には文化的にも経済的にもギャップがあるから、此等都市が国家全体の統合を完成するには、系統発生的な民族主義思想に結びついた官僚統制の中枢、金融経済の指令部、主要な教育、文化的の統合機関の位置として、国民的統合、国民的一致の中核としての役割をとることが求められた。

プライメイト・シティに於ては此等の統合機関が構造を新たにし、規模を拡大し数を増加して都市として急速に拡大してゆく一方、国家的な情報と新しい技術を伝達する中心として小規模な地方都市が現れるが交通通信手段、都市的施設の未発達な状態では都市が逐行すべき機能は限られているからプライメイト・シティに比較すれば其の成長は遙かに緩慢である。

東南アジアは一九七〇年全人口の八割が農村人口であつて、ラテンアメリカやアフリカと共に世界の最も都市化していない地域である。戦後人口爆発と言われる人口の急速な増加によつて一九五〇年一七、〇〇〇万であつた東南アジアの人口は一九七〇年に二八、五〇〇万に増加し、都市的状況下に住んでいる人口は此の間二、三〇〇万から七、七〇〇万に増大したのみでなく、都市人口のより多くが大都市に住むようになつた。

図2　東南アジアに於ける都市分布，1970



Y. M. Yeung & C. P. Lo, eds. Changing South-East Asian Cities, Oxford University Press, 1976. 序論より。

一九三〇年五万であつたジャカルタは一九七〇年一〇倍の五〇〇万に、六〇万であつたマニラは四〇〇万、八〇万であつたサイゴン―コロンは二〇〇万、シンガポールも二〇〇万となつた。その増加はおびただしいものがあるから一九八〇年代にはジャカルタは一、〇〇〇万を有する都市となり、ホンコン、マニラ、サイゴン、バンコックは五〇〇万以上の都市になると予想される。ブリース(Gerald Breese)[26]の研究によると、現在の発展途上国の都市の拡大は西欧の過去の都市拡大時の都市の発展より早く、現在の都市化の速度は言うまでも無く、先進国より、発展途上国に於て遙かに急速であり、此れ程急速な都市化は歴史上前例をみないことである。

ギンスバーク(Norton S. Ginsburg)によれば東南アジアに於て都市化は急速に進んでいるが、その殆どがプライメイト・シティの拡大によつているのであつて、全体人口に対する都市人口の割合は少なく、従つて全体社会が都市社会に変貌することはない。[27]

都市化の過程に生ずる問題は最初に都市化した西欧の場合と東南アジアとでは著しく異なつている。

都市化は西欧の歴史からみれば、産業革命とともに急速化したことは言うまでもない。農業と交通技術の改善を基礎に、先進国として貿易による海外市場の開拓、後進諸国の植民地化を通じて生産活動を活発化し、資本主義生産様式と動力による工場生産の発展が伴つて都市企業を拡大増加し、人々は人口の自然増加率が高く、所得が低い農村を離れて、多数の人口が新世界に移住したり、或は人口自然増加率が低く所得の高い都市に流入することによつて都市の拡大を促した。すなわち都市の人口増加は移動によつたのであつた。この結果農村では農地の保有を整理統合させ、資本主義化を進め、所得を上昇させて農村の側における人口過剰の問題を解決していつた一方、都市では社会変化にともなう水や住居の不足、不衛生、社会環境の悪化等の問題を伴いながら資本の蓄積、技術の向上、所得の上昇、都市生活環境の改善が逐次なされたから、この都市化の過程は東南アジアや他の発展途上国が直面している問題に比較すれば、円滑に都市、農村の両方の問題を解決しな

がら進むことができた。

西欧に比して遅れて工業化した日本に於ては、戦後の経済の急成長が起こる迄の永い歴史に於て、農村に於ける耕地の狭小、技術の後進性、低い生産性、低い投資及び高い人口増加率に由来する相対的貧困が都市に人口を溢出し、此等の人口は都市に於て主として第三次産業に潜在的失業の状態で組入れられ、或は第二次産業に入つても低賃銀を得て貧しい居住生活を強いられて来た。しかし戦後の経済の目覚しい発展につれて、先ず都市に於ける能率のよい大企業に対する政府の積極的な援助によつて、日本にとつて有利な国際状勢を反映し貿易の拡大を伴つて経済の急速な成長拡大がはじまり、次で大多数をなす中小企業に成長の波が及んで、工業化による都市の急速な拡大、向都離村による農村人口の減少、農業の技術的進歩、機械化、地方産業の発達による農外収入の増加を通じて、都市農村に亙る人口増加率の減少、国民所得の上昇、居住生活の改善、中産階級化が進んで先進工業国としての地位を得た。現在に於ては西欧と同様に、農村人口の都市移動はもはや底をつきはじめ、都市の拡大は鈍化してきた。

しかし東南アジアの発展途上の諸国では、欧米、次で日本で一般的であつたような低所得職業から高所得職業を求めての人口移動、都市産業の成長、生活環境改善の形はあてはまらない。

東南アジア諸国は独立後も植民地時代につくられた、先進工業国に結びつけられた型の産業構造をもつており、先進工業国を統合中心として東南アジア諸国は原料供給源としてモノカルチャー(mono-culture)と言われるように特定の一次産業に特殊化され、国際市場に低価格で輸出し、工業製品に関しては先進国の高価格な供給に依存するのみでなく、文化的にも依存している。植民帝国に建設された唯一の大都市としての港湾都市の経済機能は、先進国への原料の輸出地、先進工業国の輸入地であつて、自ら工業化することは出来なかつた。従つて、先進工業国が過去に経験したように都市工業が農村人口を吸収する型はとれなかつた。

東南アジアに於ける都市人口の急速な膨脹の原因は、農村から都市への人口の移動によるのみでなく、伝統的な農村家族では無賃の労働力として、また都市農村両者で老後の生活安定のために子供の多いことを望むため、国全体の人口の一般的増加にもよるのである。東南アジアの都市の出生率は農村と余り変りないのみでなく、高かつた死亡率は衛生状態の改善につれて低下した。現在家族計画が進められているが其の効果が現れるには少なくも一世代を要する。また東南アジアは西欧と異なつて人口問題の解決を海外に求めることが出来ず国内で解決しなければならないから一層困難な立場にある。

都市農村で人口増加が著しく、独立後都市は植民地時代の寄生性を脱して産出都市たることを求められたが、前述のように都市が国際秩序の中で置かれた不利な地位及び政治的不安定、土着資本の不足、国外からの投資の誘致の困難、農村の技術が都市では役立たず、技術の不足等で都市では産業が未発達で所得が低い状態にあるのみならず、生産性が低く過剰になつた農村人口、及び新しい政権下の治安の不安を逃れての農村人口の都市流入が起つてこれに拍車をかけ、ディビスとゴールデン（K. Davis & H. H. Golden）の言う過剰都市化（over-urbanization）の状況となり、[28] 此の状況は後のシンガポール、香港の都市工業化の例にみるように一九七〇年頃迄は続いた。都市の工業が未発達の状態では、増加した人口は教育と技術を要しない小売、卸売、輸送、貯蔵、建築、立売人、奉公人、運転手等となつて妥当に生計を維持し得ない第三次産業に分類される職業に従事するか或は失業者となつている。国連の報告によれば此の種の第三次産業に従事するものはラングーンで四〇%、バンコック、マニラ二七%を占めている。[29] かくて農村から都市に移住したものはその僅かな貯えをも消費しなければならない状態に置かれていた。

この種の都市化の型は、競争的な国際社会に於て従属的な地位に置かれ産業発達のとげられない国全体の貧困が集中的な型で表現されているのであり、財源に不足する都市においては行政は妥当に行われず、都市生活に必要な多くの施設、サービスに欠け、衛生状態は不良であり、住むに家なきものは土地を不法に占拠し、仮小屋を作つてスクワッター地域をなし、ま

た巨大なスラムがあり、職業を得ても搾取的な賃銀を得るに過ぎない状態に於ける都市生活を余儀なくされている。

此の都市化の過程は溢出（push）と吸引（pull）の方式からみれば、工業化の進まない都市が人口を吸引する能力が無いにも拘ず農村は都市に向けて人口を溢出し、都市農村に亙る人口増加過剰が起きているのである。西欧に於ては産業革命の結果、日本に於ては戦後の経済成長の結果、都市に新たな労働需要が起り、一方農村では技術の進歩の結果労働需要が減少して人口の向都離村がはじまり、終には農村の移動人口は底をついて、都市の拡大を鈍化し、移動は都市と都市の間に多くなる型とは対照をなしている。

このようにして急速に拡大してきた東南アジアの大都市は、植民都市の時代には、既に述べたように欧米のエリート及び土着の貴族、政府役人及び経済力をもつた一部の中国人が上層をなし、中層に主として商業や工業に地位を得ている中国人、印度人、最下層に不熟練労働者、立売人、サービス従業者としての中国人、印度人と、土着人が都市の階層を構成して、民族的な複合社会をなしていた。

スキナー（G. William Skinner）によれば、タイは元来独立国であるが、半植民地的状態にあつたバンコックは複合社会であつて、土着人は政府の役人や専門職と不熟練労働者や下男下女に両極化しており、アジアの他の大都市と同様中国人が商業、金融、製造業に集中し、全国人口の七〇％をしめていた。(30)

独立後はヨーロッパ人が持つていた政治権力は土着の上層に移されていつた。土着の貴族、政府官僚、軍事政治の指導者及び中国人を含む実業家達は欧米人に代つて社会の最上層を構成した。彼等は新しい独立国の形成原理として系統発生的な価値を強調しているが、其の思想や生治態度に於ては西欧化している。彼等自身及び其の家族は欧米の教育と生活様式を身につけることが高い社会的地位を示すものと考え、彼等は都市に於ける全市民の所得の多くの部分を獲得し、貧しい一般庶民とは隔絶した豪壮な欧米式の邸宅に警備の人間に守られて居住し、彼等自身の階層及び先進国の人間のみが所属し得るク

ラブに所属し、高い社会的地位の集団を形成している。彼等の主要な関心はより多くの富の獲得と、子弟に欧米の大学教育をさずけること、欧米に旅行することであつて、大衆にとつて最も重要な問題である住居、雇用、保健の問題には余り関心も理解も示さない。彼等には国民としての自覚の弱いものも多く、身内の者には助けの手を伸べるが他人に関しては無関心であり、ビロリヤ（Leandrs A. Viloria）によれば政治の問題を個人的な問題と考えることが多く、これが政治的腐敗を生ずる原因となつている。(31)

中流の上層をなすものとして、より地位の低い役人、大学、高校の教師、オフィスワーカー、ジャーナリスト等数的に限られた、思想や生活形態に於て西欧化した知識層がある。彼等は高い教育と政府機関と企業での雇用を基盤として居り、自らの経済力を持たず、政府の高級官僚や企業を支配する上層に従属しているから、積極性と創造性に欠けている。

彼等は郊外の中流階級の住宅地内の独立家屋に住む。彼等は相互扶助の組織を必要とせず隣人を知らないし、めんどうだと考えて知ることを望まず互に没交渉である。彼等は自らを守るために塀にかこまれた家に住み、猛犬をかつているのも特徴の一つである。近くに友人もいるが、これは何等かの機会に相互にたまたま気が合つた為であつて、地理的に近いためではない。特に自動車を用い広範囲に亙つて行動するようになると、つき合いは広い地域的範囲にわたるようになり、近隣とのつき合いは減じてゆく。

アジアから来た外国人として商工業で活発な活動を行つている中国人及び印度人は、当該国家の文化に同化する程度は少なく自らの民族的文化を保持し都心に近く密集居住し拡大家族をなして自身の相互扶助の組織および宗教、教育機関をもつて居り、植民地時代と同様主要な商工業を独占している。シンガポール、香港の最大人口集団は中国人、ラングーンは印度人都市であり、サイゴンはコロンを含めば中国人の街、マニラ、ジャカルタは大きな外国人集団及び中国人の要素をもつている。此の集団には上中下の各層を含むが一般に中層の位置を占めるものと言えよう。独立国家としての国家的統合が、彼

等の集団の解体を導くようなものになると考えれば凝集を強めることになるから、より広い国家的見地に立つようにならなければ、彼等に自分等の集団を越えた国家への忠誠心は生じにくく国家的統合を困難にしやすい。

都市人口の多数を占める最下層の人口は、戦後農村から移住した土着の移住者が大多数を占め、都市に雇用されるに適した教育と技術を有しない工場労働者、小商人、自動車運転手、立売人、臨時雇いの労働者及び失業者であつて、極め低い収入を得るのみでスラムの住人或はスクワッターとして多くは都市周辺に居住している。彼等は保健や福祉の最低の水準さえ確保し得ない状態にある。

ホルンスタイナー（M. R. Hollnsteiner）のマニラのトンド（Tondo）のスクワッター地区の調査によると、此処では新来住者は親戚や友人のすすめで来るので他人ではなく、貧しい生活状況では人々の交わりは単なる社交ではなく、事ある毎に相互に食料、金銭やサービスの提供、子供の世話、ダンス、遠足、共同の宗教的行事等を行い、狭い道を基礎単位に近隣関係が形成されている。社会統制に関しては人格的な相互行為のレベルで行われ、青年達は外来者による犯罪や火災から自らを守るために警防団を組織し、住人は地域の規範に反する行為をすれば生涯をすごすべき此の地からのけものにされるので規範に反する行為は少ない。(32)

かくて都市の外国人集団や下層に於ける社会関係は、ワースが西欧の都市を例に主張するような、都市的環境が作りあげた匿名性をもつた非人格的なもののみではなく、(33) 民族社会的、農村的な特色をもつた人格的関係があり、これは同じく東南アジア都市でも西欧化した上層或は中流階級の近隣関係とは著しく異なつたものである。

此の都市に於ける下層の人間行動の型は東南アジアの他の都市についても見出せるようであるが、東南アジアのすべてのプライメイト・シティの下層にあてはまるわけではない。筆者の調査によると香港都市下層の場合は此等の都市より遙かに高密度であり、人口が多く、中国が封鎖体制をとつているために出身地との関係がたたれ、また政府の都市計画、再開発計

画が急速に進んでいるため、下層は移動を余儀なくされ都市内の移動性が高く匿名性が強く、非人格的な関係が一般になつているのであつて、東南アジアプライメイト・シティの下層の行動の型が同一であるのではない。[34]

以上述べたような変化の過程と構造とを有する発展途上国の都市が、今後如何なる過程をへてどのように構造を変化させてゆくかを知ることは、社会及び其の派生体としての都市変動の研究の重要な側面である。

ムーア（Wilbert Moor）は、世界の諸社会は相互に異なつていても発展変動の過程を通じて次第に類似の構造を有するようになると主張する。人々の生活が農村生活から都市生活に変ると、地域間の相互依存関係が増大し、孤立の状態にあつた社会も他と共通の技術を用い、共通の市場に関わり、共通の考え方をするようになり、社会の一般化、標準化の進む過程を通じて、社会集団はその変化に応じた構造と機能を持つようになるというのである。[35] 従つて、従来、社会によつて異なつていた社会組織、社会関係、人格を変じて発展方向及び其の構造に類似性を持つようになることになる。

またライスマン（Leonerd Reissman）は都市成長、工業化、中流階級、ナショナリズムの四つの変数をとりあげて、その発展の程度によつて世界の諸国を四段階に分類し、最低の低開発国から最高の大都市社会に至るまでの構造を記述し、都市発展の予測の手段とした。[36]

ライスマンの場合は、社会は一定の方向に変化しているのであつて、後進国は先進国の進んだと同一の過程を進むのであり、各社会の相異は発展の程度の相異であるとみているのである。即ち、発展途上国の遅れを先進国に比して不可避な進化の過程における遅れとみているのである。

凡ゆる社会の変化を一定の方向に向つての変化であるとみる見地には問題がある。社会変化の過程には、代表的には英国に例示されるように近代社会システムを自らの社会の中から創造した内発的に発展した型と、外在の近代化システムを借用することによつて発展した型に区分される。

これまでの東南アジアの土着の都市化、植民地的都市化、脱植民的都市化の記述の中で明かにされたように、東南アジア社会は西欧と異なつた伝統的文化と自然環境を有し、此れとの関連に於て外在の西欧文化を植民地としての従属の立場から借用しつつ変化したのであつた。此の型は同じ文化借用でも日本のごとく系統発生的に自らの状況に対応して外在の西欧のモデルを借用し、これを自国の文化の中に融合し、全体を統合していつたものとは構造が異なつている。

フランク（Andre Gundar Frank）[37]の言によるまでもなく、東南アジア諸国は西欧社会への従属の型をとつて植民地として発展し、独立後も発展途上国として先進工業国との間には産業構造や輸出輸入の構造に不平等な相互関係にあるのである。世界の諸国の相互関係が強まる程、先進国の発展途上国への影響は強まり、発展途上国は国際社会で従属的な分業の位置をしめ、相対的貧困の地位を脱し得ず、先進国との格差は広がつてゆく。ムーアやライスマンの主張する過程はあつても、ポルテス（Alejandro Portes）によるまでもなく[38]、此等は重要な要素を捨象し去つているのであつて、発展途上国の社会変化は、自然環境や文化の相異と共に、支配と従属の型をとる分業体系をなす国際秩序の派生体（sub system）として理解することが必要である。

即ち先進国と発展途上国は人類の歴史に於ける二つの異なつた段階として理解するのではなくて、各々は世界経済に統合された部分としてあるのである。西欧の急速な経済成長は現在周辺地域をなす発展途上国から資源を獲得し、製品を輸出する市場となることなしにはあり得なかつたのである。

ベネト（Francisco Benet）によれば、都市の社会学的研究はミクロ的分析に終らずより広い理論的な立場から考えることが必要になつている。都市は広い社会経済システムを反映する派生体であるから、大きなシステムとの関係を無視するときに研究は正当な道をはずれてしまうのである。[39]

従つて此の様な社会の統合中心としての都市の構造と其の変化の過程は此の構造の中で起ることになるから、先進西欧社

会の都市と同一の過程を通じて変化するのではなく、発展方向に部分的類似性はあつても基本的な構造に於て類似のものにはなりそうもない。

ワース（Louis Wirth）は、欧米の都市研究を基礎に凡ゆる都市の分析に有効な都市理論として構成した〝生活法としての都市性（Urbanism as a Way of Life）〟を論じ、人口の規模、密度、異質性の増大につれて、第一次的接触は第二次的接触に代り、人間関係は非人格的、表面的、一時的、断片的となり、血縁関係は弱まり、家族の重要性は衰え、近隣関係は薄らぎ、社会的紐帯の伝統的基礎が解体し、社会的規範からの逸脱も多くなるとして都市の典型を構成した。(40)

またレッドフィールド（R. Redfield）は、ユカタン半島の未開社会の調査を基礎に孤立的な民族社会は都市社会の異質性、組織の解体、世俗化、個人化が伝播してくることによつて、都市的社会に変化してゆくとして、都市の反対の極にあるものとして民俗社会の典型を構成した。(41)

ワースとレッドフィールドの見解は、都市は社会変動の中核であり、都市的環境に於ては伝統的な型を解体して新しい社会の型をつくり、此の型は周辺地域に伝播され広大な地域の社会構造を変化させて、都市の統合の中に引入れてゆくとするものでレッドフィールド（Robert Redfield）の理論と共に都市農村の連続体の理論として欧米の都市研究に支配的な影響力をもつている。

此の理論に対する最も重要な批判は第一に、述べられたような解体的な典型が都市の普遍的な形態であるかどうかである。此等の理論は、都市や民俗社会の組織的な認識に基本的に重要な方法を与えていることは言う迄も無いが、現実は複雑種々であつて当てはまらず、認識の手段として都市農村の単一の型ではなくいくつかの型が必要なのではないかということであり、また、都市は変動の過程で解体するとは限らず、全体社会の構造の変化につれて種々の型で再構成されてゆくのではないかということである。此の問題に関しては拙著『日本都市の発展過程』の中で日本の事実を基礎に証明し得たと考えている。(42)

第二に、都市は社会変動の過程で其の中核として重要な機能を営むとしても、ワース、レッドフィールドでは都市と農村のみに注意が集中され、他の要素が無視されているが、スチュアード（J. Steward）が指摘するように都市は全体社会システムの特殊化した一部に過ぎないから、都市化は相対的に封鎖的な農村や民俗社会がより大きな社会体制に統合される過程の一つであり[43]、ルイス（O. Louis）の言うように民族社会、或は農村社会は都市化されることなしに国家や民族社会の派生文化として統合される過程で変化することがある[44]。同様にベネト（F. Benet）[45]やショバーグ（G. Sjoburg）[46]も指摘するように都市は国家民族社会の派生体（Sub-system）とみることが必要であるとされる。

我々は東南アジアの都市の変化の記述の中で区分し、最も妥当と考えるのはフランク等[47]の理論を考慮し、事実に基づいて修正をほどこしてゆく場合に、以上述べたより更に広い枠組、即ち相互関連した諸国の関係からなる変動してゆく国際秩序の中に位置づけられている諸国を、相対的に孤立的な土着文化の社会、植民地社会、脱植民地の発展途上国、これに対する資本主義的先進工業国（恐らく社会主義圏でも類似の分類が可能であろう）に区分し、国際秩序の変動の中にある国家民族の状況との関連で都市の構造及び其の変化の過程をみてゆくことであつた。従つて私は此の論文の中では土着の都市化、植民地的都市化、脱植民地的都市化に区分し、伝統的価値のあるものは保持し、他のものは脱落し、また他のものを加えつつ変化してゆく過程として、レッドフィールドやシンガーの都市の文化的役割の概念及びホゼリックの都市が生産的であるか否かの概念を用いて都市の記述を行つた。我々は言うまでもなく、ワース、レッドフィールド等の都市農村の連続体の概念からも、他の面で極めて多くを学んでいるが、妥当に事実を認識するうえでは此の修正は止むを得ない。

ハウザー（P. M. Hauser）はワースやレッドフィールドの連続体の典型をラングーン、バンコック、ジャカルタ、カルカッタの東南アジアの諸都市の社会構造の分析に適用テストした結果、此の典型は現実の構造に合わないと批判し、此等の典型は世界的な普遍化に到達しようとする一九世紀の努力と二〇世紀に於ける一般教育の為に智識の統合を計ろうとする関心

との混合物であり、未だ不明なことに関しても統合する結果になつたとしている。[48]

ハウザーは更に東アジア都市に関する別の論文の中でワース及びレッドフィールドの典型を西欧中心主義の考え方、西欧の生活様式が普遍的であるとするの誤りを犯すものであるとして、彼は此等の理論を検討して、アジアには西欧と同様な都市化は起きないとし、次の如く述べている。

アジアの大都市は規模は大きくても複合的な構成でありまた二重経済であるから、都市の中にあつても土着の人間は実質的民俗社会の状態で生活し得る。高密度であつても機能の分化は起らず、土着集団の中に著しい変化は起らない。多くの都市では人口の異質性にも拘らず、外来の民族集団の中にも、また内在の民族集団の中にも、世慣れた態度を増し、行動の合理性、見解の国際性や、革新や変動を生じない。アジアの社会的個人的問題の多くは生活法としての都市性から生ずると言うより、国民全体の問題であり、低い生産性と大衆の貧困から生じているのである。[49]

扨以上のことから明かになることは東南アジアのプライメイト・シティでは西欧都市と類似の生活法を持つのは僅かな数の都市エリートと中層をなす知識層のみであり、外国から流入した民族は其の生活基礎としての伝統的な生活法を維持し、植民時代からの都市居住の永い歴史的経過を経ても其の社会構造は変化しない。一方戦後人口の増加と共に貧しい農村から溢出されて来た都市人口の大多数をなす土着民からなる都市大衆は疎外された状況にあり、都市的環境に入つた歴史が浅く、また多数が急速に流入し、しかも貧困なる故に、都市居住に適応した居住環境はなく、住居、保健、福祉、雇用何れに於ても困難な状況にあるが、彼等は伝統的な民俗社会或は農村的文化を基礎に相互扶助の組織を形成して生活を営んでいる。

かくてプライメイト・シティは独立後も社会階層を異にした西欧文化型の集団と中国印度の伝統を保持する集団と土着の民族文化に生きる集団の三重の構造をなしている。

独立国家の思想的基礎が系統発生的なものにあるとし、これを基盤として近代化、工業化が計られ産出的社会形態が整え

られ全体が国家として統合することを目的としているから、新しい国家の計画を実現してゆく中心としての首都の構造を改めなければならぬとする。

植民帝国から権力を護り受け西欧化した上層が、これと異なつた文化を持つた大多数をなす土着の民や、経済の世界で有力な外国の民族集団等を、一定の秩序体系にまとめ、国家の計画を実現してゆくことが必要であるが、現在成長しつつある都市は相互に凝離した諸集団よりなる複合社会であることを示して、国民文化の出現に必要な心と社会を統合し秩序立つた社会経済程序を形成してゆくに障碍となるものが多い。国民大衆から離隔する傾きのある都市上層は都市及び国家を何のように指導してゆくことが可能であるか、また封鎖的な外国人民族集団によつて経済機能を支配されている都市には土着民の円滑な流入は可能ではない。

此の様な複合的な社会の状況は植民時代の遺物であるが、独立国となつてもこれを克服することは容易ではない。此の都市の複雑な社会的、民族的、経済的区分は独立国家の首都として国民文化の統合中心であり、新しい思想と制度を全国に向つて伝播する首都としての役割を果すことを困難にする。従つて独立と共に、古い植民地主義によつて色づけられた植民都市は新しい国家の指導者達が新国家の首都として不適当であると考えるのは当然であつた。

また、首都移転の問題には、以上の社会構造上の問題の他に、此等の都市の立地の歴史上の問題がからんでいる。此れに関しマーフィ（R. Murphey）の述べるところを要約すれば以下の如くである。此等の都市は植民帝国の企業家達が此等の国の輸出及び西欧諸国から此等の国への商品の輸入に便な位置として沿岸に建設した。此の位置は国の中心位置をはずれ独立国の国政の中心であるよりも植民地としての西欧支配の商業活動の中心であつたから、余り西欧の影響にさらされず、また、植民都市としての遺物に禍されず系統発生的なイメイジに従つて独立国として国を創造するために、植民地化される以前に中心であつた位置に首都を移動する運動があつた。

しかし如何なる現代大都市も其の機能は地方的、国家的な行政中心に限られるものではなく、新しい国家は経済的に西欧のみでなく世界諸国との貿易に依存しており、将来も国の発展のために相互関係を強め先進工業国の資本や技術や知識や思想を導入しこれを自己の民族文化と結びつけて同化しなければならない。植民都市には既に発達した陸海空路の交通網が集中して国内で最大の近接性を有し、商業組織も有し、製造業もあり、また、政治文化的な機関もあつて、民族主義的思想によつて新しい秩序を作るとする考え方は此の地を拠点として西欧から導入されたのであり、此の地は経済と共に思想及び制度的変動の中心であつた。此の地には多数の人口が集中し、各国に於ける唯一、最大の都市であり、大都市に随伴する多くの実際上の利益があると共に、首都としての威信をもち得る唯一の都市でもあつた。(50)

かくて幾多の問題はあつても、フィリッピンでは実質的にはマニラが以然首都であるが郊外ケソン市に首都機能の一部を移し首都としたことを除いて、植民地首都の利益が首都の移転を思い止まらせ、都市に根づいたエリートが国家の人々に共通の感情を持たせるという困難な仕事を行うのは以前の植民地首都、現在の独立国のプライメイト・シティとして全国及び国際社会にも国の中で全国及び関係諸国に対し最大の近接性を持つた首都に於てであつた。

東南アジアの首都は此等の国に殆ど存在しない民族文化のイメイジを作ると言う或る意味で系統発生的な役割を担うことになる。従つて此等の都市には新しい政治、経済、文化の観念を広め、全体を新たな形態で秩序立てる統合機関が建設され或は拡大集中した。

系統発生的な価値を象徴するために多くの国の首都の都心には巨費を投じて民族の政治文化的伝統を代表する巨大な記念碑や建築物、国の威信を示すために国際会議場や国際運動競技場が建設された。

国の建設指導は、此の首都に集つた、構造や思想に於て西欧の方式をとり入れた中央政府の機関、大企業、最高の教育機関、国家的規模を持つたマスメディアの機関を中核として、政治、経済文化に亙る中央集権的な方式によつて、首都とは著

しく異なつた土著の文化と低い経済生活を持つた地方小都市及び農村を包んで統合が計られた。

首都は国の主な政党や派閥の本部があり、都市に基礎をもつた軍人、政治家や外国の権力によつて支持された派閥が互に争つて、首都を支配し国家を支配するものが決定する。したがつて多くの野心家は頂上への道を求めて首都に止る。

首都には各種の教育機関が集中して、地方から将来幹部たる可能性のあるものを集め、新しい技術を教え、新しい国民の理想を広める使命感を植えて、地方農村に帰り、その普及に努めることをすすめたが、此等の民族主義的教育は西欧の価値を基礎にした教育であり、首都では他で得られない高い収入を得、快適な生活、文化娯楽に接する可能性があるので、西欧の教育を受けると自らの価値を離れて、西欧化にひきつけられて首都に定着する。(51)

民族主義運動の指導者の多くは植民都市で前の植民支配者の思想をうけついで教育をうけ、首都の諸機関に関連して運動を行つているから、民族運動の本質は首都に基礎を置いた運動である。首都は教育訓練の中心であり、国を支配する為の政治経済文化機関の中心である。

しかし首都を社会変動の中心とみ、その変化の焦点を首都に置くことは、政府が限られた企業家、中産階級、製造業者、商人に依存することになり、現在直面している最も重要な問題の基盤となる大多数の農民の問題を等閑視することになる。

首都が工業化せず雇用の機会が無いのに、首都は自然増及び農村からの人口移動によつて拡大し、貧困層が増加し社会が無政府状態に陥ることが恐れられているのは、多数の人口を占める農村の貧困の故である。農業の改革なしには農村の問題も首都の問題も解決しない。農民の生活を改善し其の安定的支持なしに、植民帝国が行つたように軍の力に依存して支配者が権力支配していけば、その権力行使の正当性は疑わしいものになる。発展途上国に於て唯一の組織立つた大集団は軍隊であることが軍人の独裁的支配を齎しやすい。

系統発生的な理想と言つても、ラクイアン(A. Laquian)が主張するように、東南アジアの諸首都は、偉大なる聖なる都市が

土着都市化の時代に演じた役割とはちがつた、主に政治的な役割りに代ろうとしており、首都の上昇する政治的役割は民族主義に依存せざるを得ない。首都エリートは神権的な王と異なつて、その権力は絶対的ではないから、大衆の支持する思想によつて国民の統合を達成し、権力行使の正当性が承認されて[62]、はじめて新しい国家の諸計画を実施し都市を寄生都市から産出都市に変化させ得るのであつて、都市の問題は都市自身に対する対策によつて解決し得るのではない。

かくて首都は全国の統合的中心であつて、問題の解決には生産及び就業の場としての都市工業の発展の必要性は言うまでもないが、問題の主要な根源は多数の人口を占める農村にある。農業技術の進歩、農業組織の改革や、また農村の過剰人口を吸収するために農村地方に労働集約的な産業の建設を必要とし、都市農村を含む全体の均衡ある発展の基礎に立つてはじめて大衆に支持された国家の統合原理としての民族主義の実現が可能になり、安定した政治が確立し、国の発展を計る計画が円滑に行われて都市の問題の解決も計れる。此の目的の遂行のために現状に於ては、資本や技術の不足する発展途上国にとつて先進工業国の政府及び民間による経済協力や技術援助は欠くことはできないし、人的資源の開発には文化交流の促進を計ることが必要である。

2　プライメイト・シティの構造と都市問題及び都市計画

(1)　都市の地域構造と商工業

さて以上のような過程をへて構成されて、新しい国家を形成する役割を担つて来たプライメイト・シティとしての首都は植民地時代の国家レベルに於ける政治、経済、社会構造及び立地の伝統を受け継ぎながら逐次的に変化したように、地域構造に於ても同様に前からの構造をうけつぎながら、それを変化していつた。

独立後の東南アジアの首都はフィリッピンを除いては植民時代の首都であつた。その立地の基本的な条件は植民地の農産物及び鉱物を集荷、貯蔵、加工し、船積して植民帝国に輸出するに便な位置であり、また先進工業国の製品を植民地で販売

するに有利な大型船の出入の自由な吃水の深い港湾の位置でもあつた。勿論此の位置は自然にそなわつたものとして存在したのではなく、植民帝国政府の積極的な援助によつて企業家が其の富と技術と更に政治権力とを用いて建設したのであつて、此の位置に植民帝国の政治、軍事、経済、文化の統合機関が集り、土着の人間や中国人や印度人も此の機関に直接的或は間接的に関連して人口が増大し、植民都市として成長していつた。

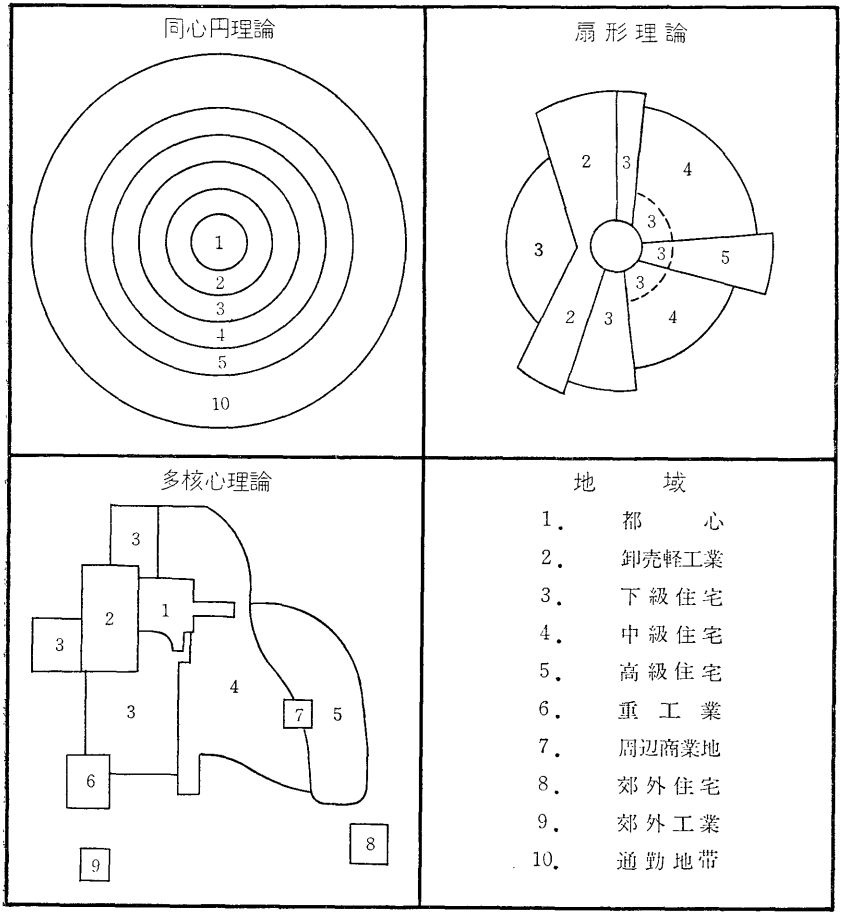
此の位置は植民地時代に植民帝国の利益を目的とする活動の拠点として建設されたのであつて、既に述べたように此等の都市は植民地自身の発展からみれば寄生的であつた。独立後東南アジア諸国の指導者は自国の発展に益する産出的都市にしなければならないと考え、系統発生的な思想を基礎として新首都の建設を計つた。

しかし、此の都市には必要な統合機関が既に整備されており、首都となるに足る威信を得ており、国際社会との関係に於ける東南アジア諸国の発展及び自国の支配統合の立場からも必要な交通、通信の技術を通じて各地に対する近接性を有し統合的活動の最適地であり、更に此れのみが各国に於ける唯一の大都市であつて、他に代るべき都市が無かつたから、この都市が独立後も首都として選ばれた。それだけに独立後の首都も植民都市時代の遺制を有する都市であつた。

独立後全体社会の構造の変化に応じて都市の構造や機能を変化することが必要で、都市は旧来の位置にありながら、独立国の首都にふさわしく其の構造を変化してゆくことになる。先進工業国とは異なつた条件下で、全体体制が変化したので、その中で派生体としての都市の内部構造も当然先進国の都市の構造とは異なつたものである。

都市自体の構造の研究に先ず必要なことは其の生態的構造を明かにすることである。バーヂェス（E. W. Burgess）の都市の生態的構造に関する理論としての同心円理論（Concentric Zonal Circle Theory of Urban Growth）[53]及びこれに関連した諸理論[54]は先進工業国の都市の実証的研究に大きく貢献したことは周知の事実であるが、発展途上国の大都市の研究にも広く用いられている方法であり、此の理論のテストを通じて現在多くの新しい知識が累積されている。従つて、我々の東南アジア

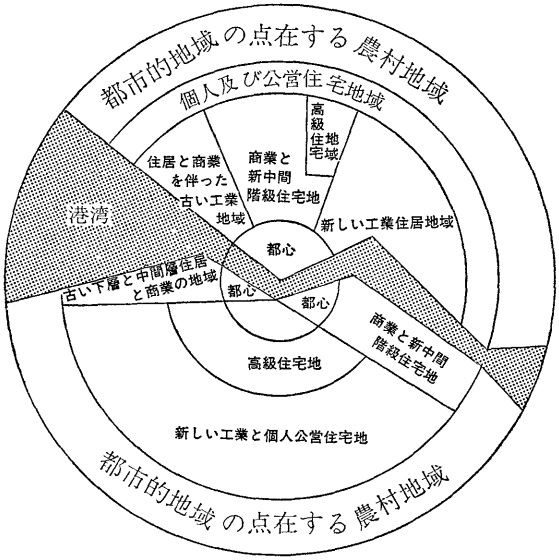
図3　大都市の土地利用に関する理論



同心円理論は凡ゆる都市に対する普遍化，扇形理論の各扇形の位置は都市によって異なる，多核心の図は可能な多くの型のうちの一例を示す。

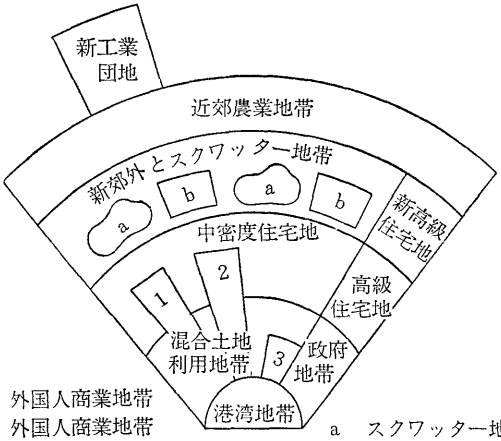
Chancy D. Harris and Edward Ullman, The Nature of Cities, Paul Hatt and Albert Reiss, Cities and Societies, The Free Press, 1957, P243.

図4　香港の土地利用図



Hamozah Sendut, City-Size Distribution of South-East Asia, Y. M. Yeung & C. P. Lo, eds. Changing South-East Asian Cities, Oxford University Press, 1976.

図5　東南アジア大都市土地利用図

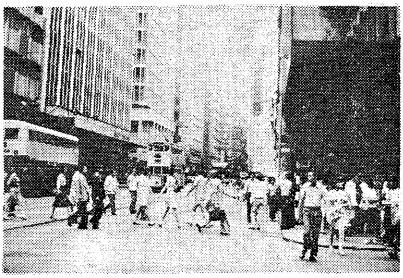


1　外国人商業地帯
2　外国人商業地帯
3　西欧人商業地帯

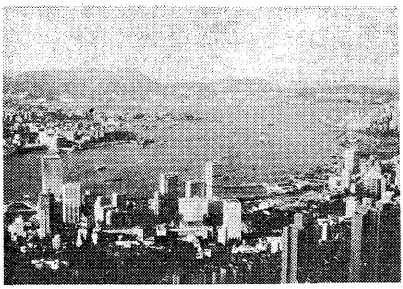
a　スクワッター地域
b　郊外

T, G, McGee, The South East Asian City, Frederick A, Preager, 1979, P. 128.

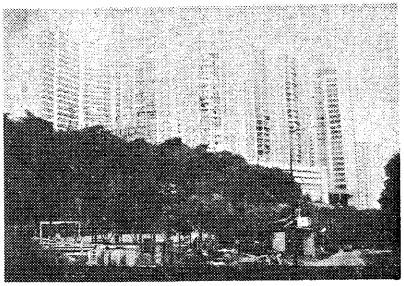
香　　港 (1)



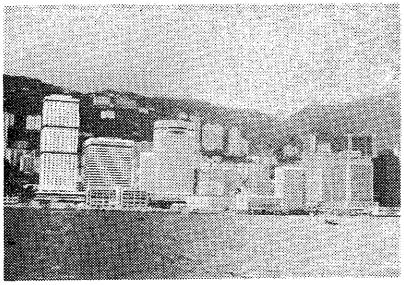
4. 都心繁華街（オフィス昼時）



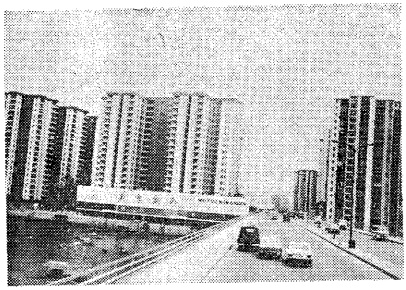
1. ビクトリヤピークから対岸九龍を望む



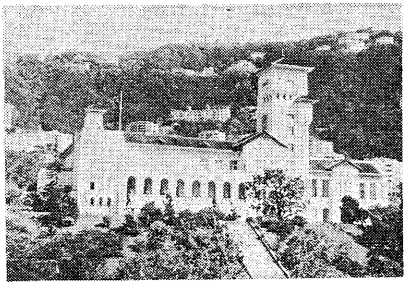
5. 市内公営住宅



2. 都　心　地　区



6. 九龍中流住宅地区

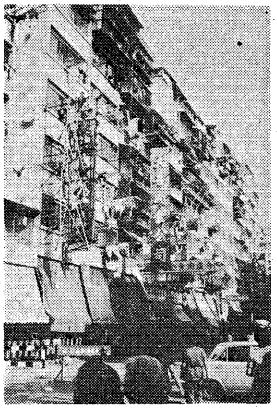


3. 香　港　政　庁

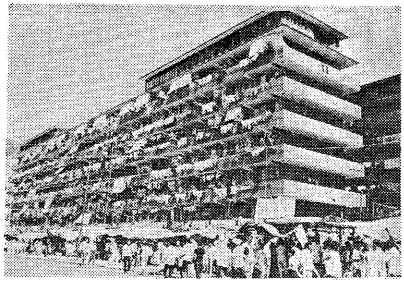
香　　港 (2)

10. スクワッター地区

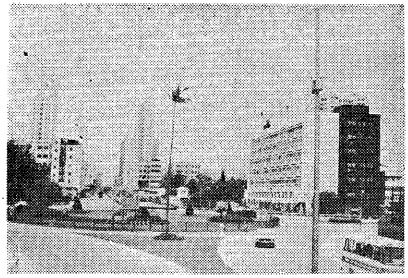
7. バ ザ ー ル



11. 九龍の高密度地区



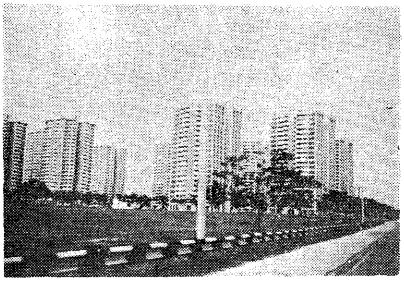
8. 九龍初期公営住宅



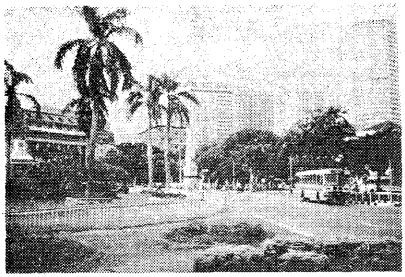
12. 九龍郊外ニュータウン

9. 九龍初期公営住宅内部

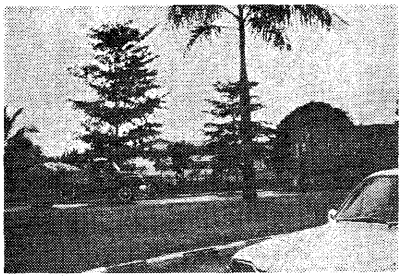
シンガポール



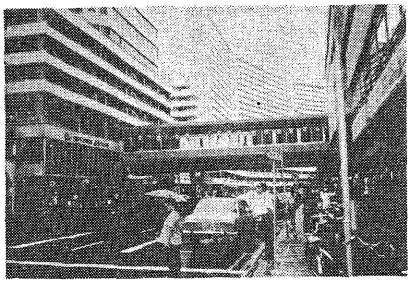
16. 公 営 住 宅



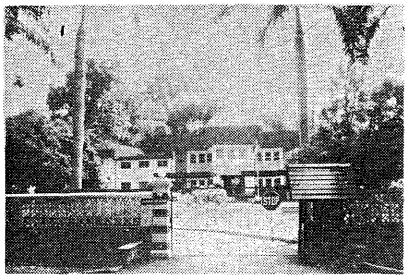
13. 都心オフィス地区



17. 郊外工業団地

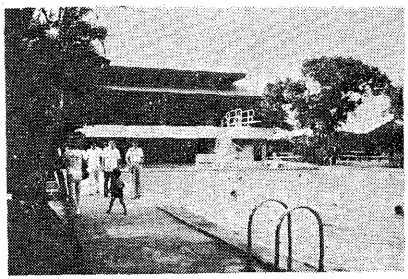


14. 都心繁華街

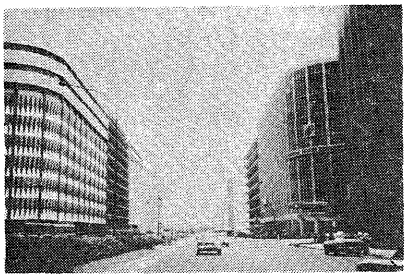


15. 高 級 住 宅 地

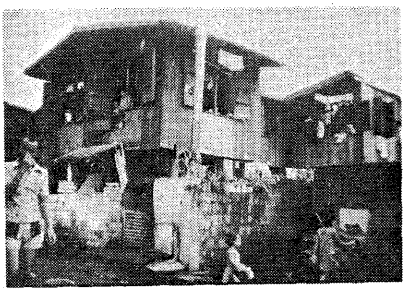
マ ニ ラ



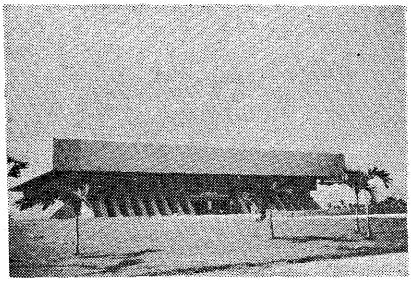
22. 上流階級のクラブ



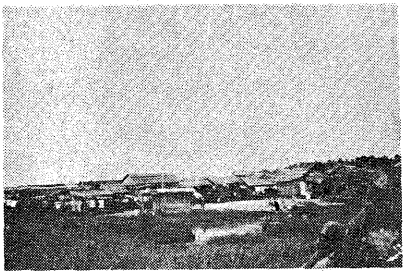
18. 新都心ビヂネス地区



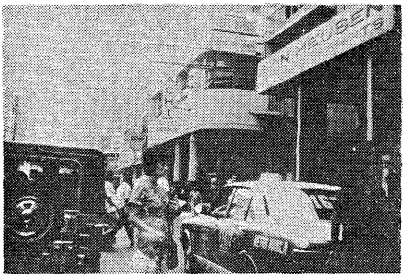
23. ス　ラ　ム



19. 国 際 会 議 場

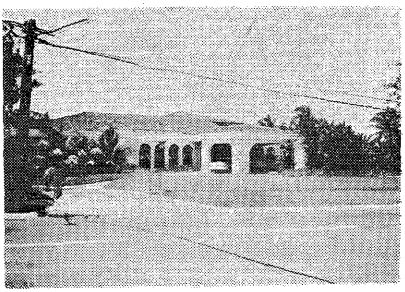


24. スクワッター地区（トンド）



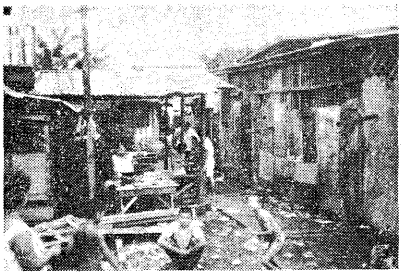
20. 中 国 人 街

25. トンド地区の指導者達（2人の男性は訪問者）



21. 高級住宅地（フォーベスパーク）

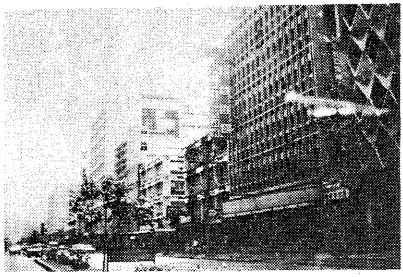
バンコック



29. スクワッター（クロントイ）

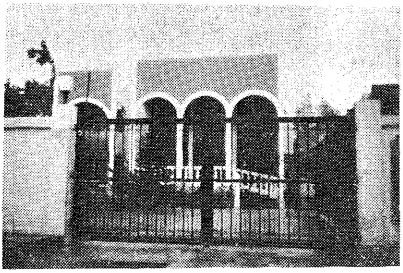
26. 旧　王　宮

30. スクワッター地区の洋服店



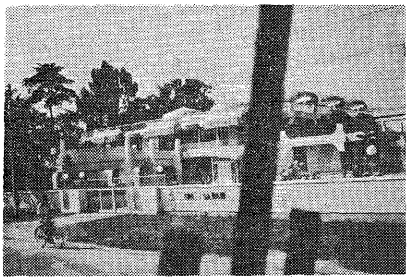
27. 都心ビヂネス地区

31. スクワッター地区のボーイスカウト
（クロントイ）

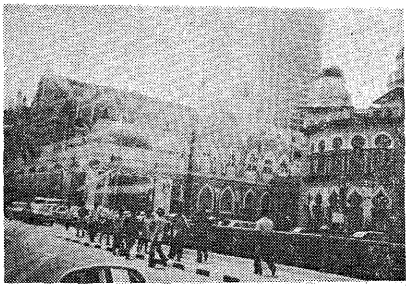


28. 高　級　住　宅

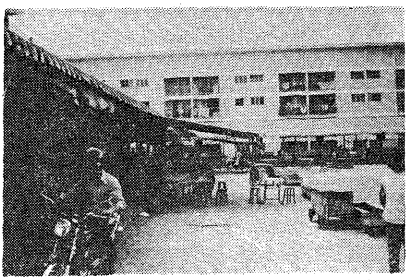
クアラルンプール



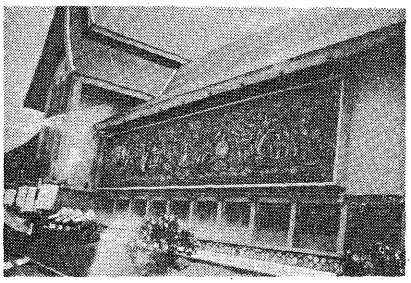
35. 高級住宅地



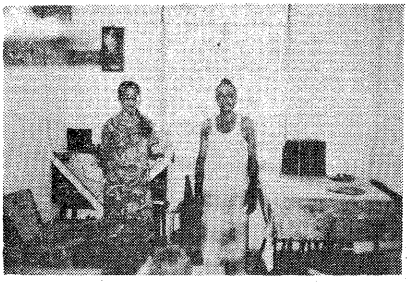
32. 都　　心



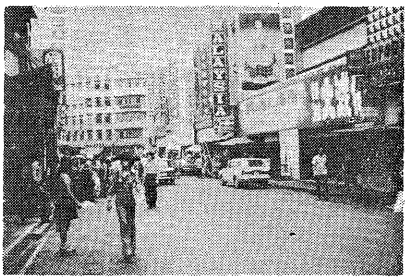
36. 政府の低所得住宅



33. 国立博物館



37. 公営低所得住宅の内部



34. 中国人商店街

の大都市分析のための仮説とし用いるため先ずバーヂェスや此れと関連する其他の理論の概略を述べることにする。

バーヂェス理論の内容や、其の批判に関しては筆者は先にやゝ詳細に述べたことがあるので[55]此処では我々のこれからの論述を行つてゆくに必要な最少限を述べるに止めたい。

バーヂェスは都市の研究を行う場合に人間の相互行為を競争、闘争、適応、同化の過程に区分し、競争はコミュニケイション、コンセンサスも文化も無い無意識な共棲関係であり、共棲関係の網の構成する構造をコミュニティ（地域社会）と呼び、闘争、適応、同化の過程或はコミュニケインション、コンセンサスを基礎に文化及び制度を形成するものをソサェティ（文化社会）であるとした。其の述べるところは余りに明瞭ではなく問題があるが、競争を基底とする共棲関係は社会の構造を決定するものとみて、この見地から拡大する都市の地域構造を述べている。[56]

都心は周辺地域に対し交通、通信の技術を用いて最高の近接性を有する位置として、他の条件が等しければ全体地域の中心に位置する。人間及び制度は最高の相互接触を求めて都心に集中するから、此の地を占めるために人間及び制度は相互に競争し、最高の地価、家賃の地となり、最も強い競争力をもつた各種大組織の中枢管理機関、オフィス、銀行、デパート、高級品商店、ホテル等が土地を占有して集中する。此の地は都市の生活活動の中心であり、都市の他の地域の位置及び構造が都心の近接性によつて決定する意味で支配（Dominance）の中心である。此の地は空間の最高密度の利用に伴つて職場と住居は分離し夜間は無人の地となり昼夜間人口の落差は著しい。都市の居住人口は周辺から都心に向つて通勤するから昼夜に亙つて人口の流れが脈搏の如く規則的に鼓動している。

都市が拡大の過程にあることは先ず都心の拡大（expansion）を生ずるが、此の過程で諸種の統合機関は都心への近接を求めて集つた人口の居住する隣接地域に侵入（invasion）し、此の地域は居住地として不適当となるので元来都心周辺に居住していた高所得者は周辺の緑と空間の多い地価は安いが高家賃の高級住宅地に離心（decentralization）し、都心に隣接の地は機

能の逐次的変化としての代置(succession)の過程をへて低家賃の遷移地帯に変化する。此の地は軽工業や青年男性人口が多く、移動率の高いどや街、スラムからなる移民の地域となり、最高密度の貧困と道徳的退廃の地域となる。

此の外側に遷移地帯の居住者たることを脱し、職場に近く住むことを望むブルーカラーの居住地があり、アメリカでは移民の二世が多い。次の円帯には比較的高い教育を受け中位の所得のホワイトカラーの住む、性比の均衡のとれた独立家屋及び高級アパートの地帯があり、この円帯を越え郊外或は衛星都市の高速道路沿いに点々と年令高く女性人口の多い高級住宅地がある。かくて都市は、同種の人口や制度が集り異なつたものとは反撥する凝離(segregation)の過程をへて、種々な自然地域(natural area)が円帯を形成する。従つて都市は種々な指標をとつてみると中心から周辺に向つて現象の増大或は減少の傾度を示すことになり、地域の傾度(gradient)の数値が自然地域の生態的位置(ecological position)を示すことになる。[57]

此の理論は人口経済社会等の指標をとつても一致性を見出せるのでそれだけ重要なものとなり、有用であるだけ多くの修正と批判も行われることになつた。

その一つはホイト(Homer Hoyt)の扇形理論である。ホイトによれば都市は都心を中心とし全体は円形をなす傾向があるが、土地利用は中心からの交通路に於て異なるため、種々な土地利用が、中心から周辺に向つて扇形をなすと言う。更に此の変型としてハリス及びウルマン(Clauncy Harris and Edward Ullman)の多核心理論(Multi Nuclei Theory)がある。多くの都心は単一の中心を核として構成されるのではなく、いくつかの核をもつて構成されている。場合によつて此等の核は都市が拡大する以前からあり、また他の場合には都市が人口を移動し地域を特殊化することによつて生じ、ある土地利用は高級住宅地と工業地帯の例に示されるように他の土地利用と反撥することによつて地域構造が構成される。[58]

パーヂェスの理論は資本主義の原理が貫徹し個人及び各企業間の自由競争をもとに経済合理性に基づく最大限の土地利用が行われることを前提に構成されている。現実には他の要因も働くので複雑になるが、資本主義社会の地域構造を分析する

には有用で、異なつた歴史をもつた欧州に於ても多く有効である。地域形態は種々であるが現実の構造を発見する仮説として価値があり、特に過程の概念が重要であることは後の多くの研究によつて証明された。

ただ一定の形態をなす理由が競争を単一の説明原理とすることには問題があり、ショバーク（G. Sjoburg）は社会構造、社会システムを含んだ全体的見地からの分析が必要で競争の他にいくつかの重要な調査によつて明かにされた価値、権力、技術、の変数を加えることの必要を述べている。[59]

東南アジアの都市に関しても此等の仮説を用いて分析を行つたもののうち、すぐれたものの一つにロー（C. P. Lo）の研究がある。[60] ローは香港を対象に国勢調査の資料をもとにクラスター法によつて土地利用による七種の地域に区分し、そのつくりだす形態から同心円理論、扇形理論、多核心理論を批判的に検討して、香港の地域構造の説明を行つた。

ローによれば全地域は㈠高級の商業及び住居の混合地域、㈡住居と併用の過密の古い中級の商店地域、㈢スクワッター地域を含んだ高級住宅地、㈣農村的特色をもつた新しい工業及び住宅地域、㈤商業活動を伴つた中級の住宅地、㈥住居と高密な商業活動を伴つた過密の古い工業地域、㈦農業活動を主とする古い農村地域に区分される。此の区分に見られるように発展途上国の土地利用は先進工業国程、明瞭な土地の機能の分化が行われていないから土地の利用は混合しており明瞭な区分はない。

ローは此の結果を基礎に同心円理論、扇形理論、多核心理論を批判的に検討し、香港は全体としては同心円理論と扇形理論の結合であり、それに部分的に多核心理論を加えたものであるとしている。

図4に見られるように港の周辺の都心を全体地域の構造を決定する核とし、其の周囲をかこんで遷移地帯があるので同心円理論の説明は有効であるが、内環地帯は土地の高低と沿岸の地形を反映し都心から放射状に出る交通路の結果、土地利用は扇形をなしている。また周辺には新しい交通通信技術を用い都心と効果的に結合した形で競争の過程をへずに政府が権力

的に大規模な転住住宅団地と工業団地を円帯をなして建設した。此の地帯には家族員数多く、収入の低い、若い人口を吸収したので、収入、年令、家族構成は中心から周辺に向つて規則的な変化を示すが其の形態は先進工業国の周辺が高所得層の居住地であるのとは逆の形態をなしている。此れはロブソン（B. J. Robson）の英国のサンダーランドの研究及び筆者の香港の研究[61]によるまでもなく、バーヂェスの理論建設の時代にはなかつた政府による多数の公営住宅建設がバーヂェスによつて観察された西欧の古典的な都市のモデルを歪曲して事実を示している。更に多核心理論は香港は其の殆どが中国人であるので民族集団であるより、同程度の所得集団の凝離（segrigation）によるものであるが、東南アジアの他の都市では異なつた文化を持つ多数民族が居住するので所得集団即ち経済競争と民族集団の持つ文化が凝離を説明する原理として有効である。

さて香港の拡大を歴史的過程からみると、植民地としての香港は大陸との交易のために港を核として建設され、其れに必要な植民地政府はじめ貿易に関係する各種の機関と人口が集中して都心を構成した。人口が増大するにつれて、香港は地形的な制約の中で発展したので扇形を構成して拡大し、人口の増加は都市を多様化し、雇用の機会を与えるために工業の発展を要したので、政府は都市の拡大を秩序あるものとするために計画を立て、土地利用に介入し、経済成長或は産出都市化の努力の一面を示すものとして、周辺に工業団地、住宅団地が同心円的な形態をなして発展した[62]。此の形態の説明は東南アジア都市ではシンガポール及びマニラには特にあてはまる。

ギンスバーク（Norton Ginsburg）は東南アジアの大都市を論じた中で、凡ての港湾都市（プライメイト・シティ）は国家の輸出貿易を支配し、輸入は僅かな部分のみを他の小港と共有する意味で類似性があるが、凡ての港は個別的であり、歴史、地理、政治、経済的に異なつているから、一般的原理を適用できるのではなく、個別に成長した港を統一的に把握しようとする試みは失敗に終ると述べている[63]。

しかしローの研究は伝統的な都市の生態的形態に関する理論を用いて一般的な形で都市の形態を説明することによつて理

論的な貢献をした。東南アジアの大都市に関する一般理論の構成を計つたマギー（McGee）がその中で前掲の図5に示したようなプライメイト・シティの土地利用をラングーン、シンガポール、サイゴン、ジャカルタ、マニラの観察を基礎に構成したが、それはローの香港の研究と重要な点で一致している。都市内の各種地域が何処に位置するかと言う具体的な形態は都市によつて相互に相当な相異があることは言う迄も無いが、ローが述べるような理論的枠組を以て有効に観察し得る程度に構造上の類似性があるから、マギーの図は東南アジア大都市としてのプライメイト・シティの一般的な形態を把握するに役立ち、先進工業国の大都市と東南アジアの大都市の異同を知るうえに重要な貢献をなしたと言える。

さて以下はマギー及びこれと類似の事実を発見したローの図を参考として、私の東南アジア都市の事実に関する観察結果を基礎に大都市の生態的構造及び社会構造の変化を相互に関連した商業活動、工業活動、住宅の分布と其の問題を焦点として述べることにする。

東南アジアの大都市を商業活動の地域構造の面からみれば大略三種の地区に区分し得る。其の第一は植民帝国が都市を建設した時以来港湾に近く政治経済の統合機関が集中し全国及び全市の活動を統合する中核となり、富と権力の中枢となる地区で政治、経済、金融、文化のオフィスや大規模化し或は専門化した店舗が林立し西欧化した都心地区、第二に植民都市建設の早期に都市生活に適した生活様式をもつて来住した中国人及び印度人の商店集中地区、第三に主として戦後の都市拡大の過程で農村から急激に都市に流入して来た土着民による全都市に分散した小規模商店である。

既に述べたように東南アジアの大都市には、一九世紀から二〇世紀にわたつて、植民帝国が投資を行い、先ず港湾やコミュニケイションの施設が整えられ、西欧式の大規模な統合機関として、行政、司法機関や貿易、金融、保険、船舶の会社が港湾の周辺に設けられ、人口が集中し、都市は港を中核として植民母国の都市を模写した形で、計画されたので、何れの都市も土着的でなく西欧的であつた意味で、地域形態も其の発展変化の様相も類似であつた。

マニラの都心は一六世紀のスペインの要塞都市の模写にはじまり、後に米国の占領下で米国式の建築の模写が行われ、ジャカルタは低地であり、水の便のよいところからオランダの都市を模写し、シンガポール及び香港は英国式、サイゴンはフランス式であつた。

独立後は以前の植帝民国の独占的地位はゆるぎ、それ等との結合も相対的に弱まつたが、東南アジア諸国が国家として発展してゆくために先進工業国、特にアメリカ、日本及び東南アジア諸国との関係は強まつた。また独立国としての態勢が整うにつれて官僚機構が整備され、立法、司法、行政の政府機関の拡大があると共に国威を象徴する建築物が建てられ、またアメリカ、日本をはじめとする諸外国の企業の進出、国際的規模で活動する機関の集中、世界にチェーンを拡げた大ホテルも加わつて都心は拡大し、植民母国を模写した地区としての姿は次第に薄らぎ、全体は独立国たることを強調すると共に一般的な意味で近代化したものになつた。

主要な統合機関に近接して特定会員よりなるクラブや西欧式の高級レストラン、百貨店、専門化した商店、映画館があり、此等は居住する先進国の人達、財源として重要な観光客及び西欧化した土着のエリート層の需要に応じている。此等の地区にはよく舗装された広い道路が通じ、美しい並木が植えられ、夫々影響力をもつた国の言語、英語、仏語、オランダ語が共通の言語として用いられている。自動車の数の増加した最近では都心から少し離れたところにガレーヂを備えたスーパーマーケットを含んだショッピングセンターも建設された。

此等の大規模な統合機関は西欧式の官僚化した組織をもち、人員を少なくし能率を上げる為に分業が高度化し、高度に専門化、技術化した個人は地位と役割と報酬を割当てられ、東南アジア諸国の伝統と異なつて、一定の規則によつて非人格的に統制され、秩序立てられている。自国のものとなつた政治機関は別として、此等多くの機関は欧米先進国及び日本の資本、或は土着資本との合併によるものもあるが、多くは外国人が主要な役員を構成し、下級のスタッフを東南アジア人が占めて

いるが此の事業所の威信は高く、他の事業所に比して雇用の条件がよいために、教育を受けた土着の知識層は此等の機関に雇用されることを望み職場を此等に求め、此等の人口も集つている。かくて都市地区は同一都市内にあつても、その景観、機関の種類と規模、運営の方式、文化に於て西欧的であつて中国文化或は土着文化の他の地区とは著しい対照をなしている。

都心の近くにアジアからの外国人である中国人或は印度人が経営している商店が包領（enclave）をなしている。彼等が此等中心的位置をしめているのは植民時代に都市が発展した時に農村的な土着人より都市的活動に適した商業経営の技術をもつた人間として来住した為であつた。特に中国人はタイや印度支那で米の取引を独占したし、金貸し、両替商、洋服店、貴金属商、医薬品、食料品商、中国料理店等の商業や、また小規模な家内工業を経営して、都市の伝統的な商工業に独占的な地位を得た。店は先進工業国方式の最少限の人員を雇用しているのとは異なつて、家族、親族、同郷の縁者からなる売上げの割合には多数の人間が安い賃銀で働いている相互扶助組織をなしている。

此の地区は二、三階建ての棟割長屋よりなり販売、生産、居住の場を同一にして高密度に密集居住している。都心が夜間オフィスや店舗を閉め、無人の地となるに反し此の地区は昼夜の別なく店を開き、中国語が共通語として話され、夜は狭く混雑した屋内を出て道路で通行人をながめ、隣人との会話を楽しむこともあつて、狭い街路に人があふれている。都心近くに中国人、印度人の小売活動の最も大きい集中がみられるが、彼等のより小さい商店集中は都市全体に広くちらばつている。

おくれて農村から都市に来住した土着人の家族経営的な極めて零細な商業は土着人の住むところなら何処にでもあり、僅かの量の衣料、食料、雑貨等を売つている、更に店舗をもたない露店商或は立売商人がしばしば違法に道路広場等に出店しているが、此等によつては最低生活の水準を維持することも難しいものが多い。

小売の機能を営む重要なものは公設市場である。東南アジアではギャーツによつて述べられた、技術は高度で雇用の可能性の限られた資本集約的な会社型（firm type）と言うような都心型の西欧式の商店以外は、既に述べた収入は少くても雇用の

可能性の多い労働集約的なバザール経済(bazzar economy)といわれる方法で行われて、全体は二重経済をなして、会社型経済が次第にバザール経済の部分に侵略してくることによつて其の構造を逐次変化している。[64] 商品に会社型経済のように定価はなく、掛引と値切りが商売の方法であるが、魚、野菜、米、肉等を販売する公設市場はバザール経済の頂点をなしている。此処では小売商を相手とするのみでなく、一般人にも小量販売をするので、朝は市民の買物客が集まり、にぎわつている。

都市工業活動の主要なものは其の構造及び立地から、三つに区分することができる。其の第一は植民都市の建設と時を同じくして港湾附近に建設された工業。第二に都市全体に分散する前産業的な土着の零細な家内工業。第三に特に独立後国家が寄生都市から産出都市への転換を計つて、政府や外国の積極的な援助と計画とによつてできた郊外の工業団地に位置する大規模な近代工業である。

東南アジアの大都市は植民帝国の侵入の拠点として建設され、港湾を通じて植民帝国と植民地間の貿易が最も重要視されたから、港湾に船舶の修繕工場、港と農園或は鉱山とを結ぶ鉄道の修理工場、奥地から運ばれた産物を輸出に適するように加工する工場が西欧的な方式によつて建設された。其の他港湾或は河岸には米や材木の産業が集中した。

土着の家内工業の大多数は極めて小規模で、家族が所有し、家族の労働に依存することが多く、他に親戚縁者を雇つて数人で仕事をしている。生産物は食料、衣料、其他の日常の消費物及び土産物等であつて、前産業的な技術、経営方式によつており、機械を用いること少なく肉体労働に依存しており、住居と職場の区分は無い。数は少ないがより大規模で家具や金属製品等の耐久消費財を扱う職住の分離した数十人の工場もある。此等の工場は先進工業国都市の場合のように一定地に集中するのではなく、都市全体にちらばつているが、其のうち比較的規模の大きいものは輸送の便を計つて幹線道路沿ひに位置している。

独立後の政府の産業政策の基本方針は植民時代以来、都市を寄生的ならしめた構造を改め、先進工業国の資本や技術の導

入を計つて産業を振興し、雇用を増大し、自国の富の海外流出を妨ぐため外国製品に対する依存度を減じ、更に積極的には自国製品の外国への輸出を増大することであつた。独立の当初は政治的権力秩序の混乱もあつて、社会秩序の不安定、土着資本の不足、外国資本の誘致の困難、産業技術者の不足のために思うにまかせなかつたが、一九六〇年から七〇年に亙つて次第に条件が整えられてきた。

特に外国の援助によつて道路港湾電力などが改善され、外部経済が整備され産業発展の基盤が整えられてきた。政府は外国企業を優遇して其の誘致に努め、外資系の或は外資との合併による近代化した大規模企業の増大の結果、従来の個人経営とは全く異なつた経営方式が導入され、従来不足していた企業の必要とする新しい技術を修得した労働者が育成された。都市内には既に用地が無いので、近郊に住宅団地を伴つた大規模な先進工業国の製品の組立て及び加工産業を中心とする工業団地が、主に政府によつて計画的に建設された。特に経済成長がめざましく、後背地に農村を有しない小領土のシンガポール及び香港では、雇用機会の増大につれて所得も上昇し、最も急速な成長を示した時には労働不足をきたす状態にさえなつたし、マニラに於ける外国企業の進出による工場地区の発展も都市経済活動の構造の変化を示し分布形態に新しい要素を加え、東南アジア都市が寄生都市から産出都市に転換するに役立つていつた。

(2)　居住地の構造、問題、計画

以上述べた流通や生産其他の統合機関は居住生活する者の側からみれば、此処に地位と役割と報酬を得て、自ら世帯を構成して一定地に居住して消費生活するという関係にある。これによつて住民の社会階層と消費生活の型、居住生活の位置は規定され、居住生活全般の形態もきまることになる。此の面から見た都市は時間、費用上の距離によつて位置と統合活動の難易を決定する交通を通じて統合機関と住民の間に財とサービスと金銭の交換のネットワークを構成しており、機関も住民も此のネットワークの中で、競争、権力、価値、技術に結びついて、都心、内環、外環、周辺等に位置して各種コミュニテ

ィを構成し、都市全体は機能的に相互関連した地域的分業の体系をなしているものとみることができる。

さて此の様な観点から東南アジア大都市に於ける人々の住居位置、其の生活形態とコミュニティの問題とを述べることにする。

植民都市の時代には征服者としての欧米人は最高の権力と社会的地位と富とを有し、都心に近い快適な環境に広大な屋敷を構え、強い紐帯をもつて一般大衆から隔絶したコミュニティを形成していた。

一方、中国人は都心に近く位置し、住居と職場を一つにし中国の社会、経済、文化的伝統を保持して高密度に居住していた。土着人は都市の周辺に土着の農村文化をもつたままばらばらに居住していた。植民都市に於ては各民族集団は包領を形成し、相対的に封鎖的であり、空間的、社会的に相互に凝離の状態にある複合社会をなしていた。

戦後の東南アジアの大都市の土地利用に関しては、ローによつて示されたように[65]、同一の地域に種々な土地利用が混在しているから、バーヂェスの同心円理論に代表される先進国工業都市のように階級により明瞭に区分された地域がある訳ではないが、ホルンスタイナー[66]（Mary R. Hollnsteiner）の指摘にまつまでもなく社会が民族集団からなる複合社会の性格を持ちながら、逐次階級社会に転化してゆく過程で部分的には西欧的な土地利用に類似性を持つようになつてきた。

この変化を生ずる最も重要な理由は、先ず国が植民地としての地位を脱却することによつて権力構造が変化したことである。土着民族が西欧人に代つて国政を支配し、経済の世界に於て単一の植民帝国の人間のみが枢要の地位を占めるのではなく、もとの植民地支配者の地位の相対的低下があると共に、土着人、中国人の進出、及び先進工業国の政府代表や企業の進出もあり、此等は民族集団の枠をある程度脱して全体として都市エリート階層を構成し集合して、一定の地域に相互の類似の居住生活をするようになつた。

植民都市の時代にはイギリス、フランス、オランダ、アメリカ等の単一の帝国の行政官、実業家が都市エリートであつて、

彼等は植民地的都市化の節で述べたような強い紐帯をもつて、排他的なコミュニティを形成していた。独立後は土着の政治家、実業家、経済的に実力をもち大企業を支配するもとの植民帝国の企業家、中国人、印度人、新たに経済的に進出してきたアメリカ、日本等の政府や企業の代表者達は、属する民族集団の故ではなくて経済力と社会的威信の故に集り、金を投じて美しい環境を造成し、五百坪にも及ぶような広大な緑の庭園を有し、プール及びベランダ付きの大きく開いた窓のあるヨーロッパ風の豪壮な邸宅を構え、運転手と幾人かの土着人の召使を雇つて生活している。

会員制のクラブはコミュニティ活動の中核をなし、各種会合、催物、ダンスパーティ用の室、西欧風の高級ダイニングルーム、バーのある建物を中心に、乗馬、ゴルフ、テニス、水泳等の設備があつて、子供から老人にいたるまで一家そろつて、他の会員、家族会員と共に生活を楽しんでいる。外国からの珍しい客は来賓として招待され講演等を行うこともある。

仕事の時間にはつきりとしたきまりのない中国人街や土着人の地域の商工業と異なつて、きちんと五時にオフィスを終つた主人は家族、友人と共に夫々の準備を整えてクラブに来て、夫々のスポーツを行い、晩餐を共にし、夜おそくまで、トランプやダンスをしたり、酒をのみながらビジネスやコミニュニティの活動、子供の教育の話、趣味の話、アメリカやヨーロッパの話をして時間をすごしている。

子供は英語で教育し、英米人教師が多く、月謝が高く、設備が整い、規模が小さく、教育の行届く私立の小中高校に通う。PTAは家庭夫人を中心に活発であり、高校に入ると米国や英国の大学への入学準備に忙しい。

此の階層の人達の買物は彼等を顧客とする欧米や日本からの高級商品をそろえた駐車場付きのスーパーや、彼等の西欧的な趣味にあつた都心近くの専門店及びデパートで行う、病院は、英米系で多くの英米人医師をかかえた私立病院、時には国立の大学病院を利用する。

此のコミュニティは植民地以来の文化的伝統をひき、以然として一般大衆の貧しい生活とは比較を絶する高いものであつ

て、問題の起ることを恐れて屢々武装したガードマンに守られ、またマニラの最高級住宅地フォーベスパーク(Forbes Park)に例示されるようにコミュニティ全体に塀をめぐらし、出入者を検問しているところもある。しかし凡ての高級住宅地の内部が同一階層の家族によつて整然と居住され、コミュニティをなしているとは限らず、バンコックのバンカピ(Bangkapi)のように全体としては高級住宅地であるが、各々が塀にかこまれた豪壮な西欧式邸宅の間の処々の空地にスクワッターの仮小屋が群をなしていることもある。

植民都市時代の高級住宅地は一般に都心に近く位置していたが、中国人、印度人等が移民として来入して職場を求めて都心近くに高密度に居住するようになると、マニラやクアラルンプールのように高級住宅地が移民の居住地と河によつて区切られている場合は別として、此の地の居住者は此等生活水準の低い一般大衆の居所から離れており、しかも気候が良く広い敷地がとれ都市のサービスや交通の便のあるところを望んだから、ジャカルタ、シンガポール、ラングーンの場合には都心附近から離れて郊外の丘に移つていつた。

戦後に於ける住宅問題の他の変化は中間階級の発生、成長による居住構造の変化である。独立国となると行政機構が拡大し、役人の数が増大した。また国家経済の発展につれて土着資本や外国資本或は合併による企業の数が増加し、其の規模を拡大したが、土着人は此等企業への就業の機会が増加した。複合社会であるから民族集団による制約は以然としてあつたが前より開かれた社会となり、此等の機関に中間的位置をしめるものが中間階級となつていつた。此等の中間層は植民都市時代の西欧人の役人の住んでいた家に住むものもあり、また郊外に政府が役人のために住宅を建設し、また民間のホワイトカラーのための近代化したアパートが建設された。中間階級は先進工業国に比して其の数は少ないが此等の居住形式も伝統的な民族集団的なものではなく、民族の如何に拘らず階級によつて決定した西欧化或は近代化したものであつた。

東南アジア都市に於ける一般大衆の住宅事情はシンガポール、香港のように経済の急速な成長があつて、政府の積極的な

公営住宅建設によつて半数近くまでの人口が此等に収容され、住宅事情が急速に改善されているところでは事情に後に述べるように相異がある。経済の発展に対応せずに都市人口が爆発的に増加している大多数の東南アジアの大都市では多数の人口は不健全な居住環境であるスラムの居住者か、或は其の地を占有する法的な根拠なしに違法に仮小屋を建て、都市生活に必要なサービスを欠いているスクワッター地域の居住者となり、此等アジア民族文化或は土着文化の居住地は都市エリートの住む西欧化した住宅地域とは著しい対照をなしている。

特にスクワッター生活は居住者に種々な圧力がかかつてくるから、社会不安を生ずる原因となるとして、此等住民自身のみならず、為政者にとつても緊急な解決を要する問題となつている。

スラムは程度の問題であるから、スラムを定義し、スラム居住人口の数を確実に知ることは困難であるが、識者は東南アジアの大都市の居住人口の半数はスラム人口であると言つている。

都市居住人口の大きな部分を占め其のうち都心近くに位置する中国人、及び印度人の移民の地区は、極めて高い密度で荒廃した居住環境にあり、快適性に欠けており、スラムの典型をなすとみてよいであろう。

中国人の都心に於ける居住形式は伝統的な中国の文化を引き継いでいるから東南アジアの諸大都市を通じて殆ど一様である。

木造の幅一五フィートの家は一階の正面は店舗、奥は住居であり、二、三階は天井はすいたままで衝立てで三、四の区画に仕切られ窓は無く各仕切に数人からなる三、四の世帯が住んでいる。台所、水道、便所は各階で共用である。各世帯の占める空間は余りに狭いので、二段になつた寝台を置き、寝台の下に寝る者もいる。必要な財産は箱に入れて棚にのせてある。衣服は壁にかけ、残つた食物は蝿帳に入れておく、家具のようなものを置く余裕は殆どなく、ラジオはあるが熱帯地であつても冷蔵庫のあるものは少い。此処で手工業的な仕事をしている者も多く、住居と職場は一つである。

屋内が此の様に狭く混雑しているので、暇があれば人々は道路に出て遊び、話し、立売商人等から食物等を買つて食し時間を過ごすので極めて混んだ状態にある。

西欧の社会ではスラムは犯罪の温床であるとみられるが、中国人の社会は移動少く相対的に安定しており伝統的な社会的規範がゆきわたり、自発的な結社もあるので秩序はよく保たれている。ジャコブス（Jane Jacobs）の言うように物的スラムと社会的スラムに区別するなら[67]、中国人街は物的にはスラムであつても社会的にはスラムではないと言える。

東南アジアの大都市のスラムは、勿論中国人街に限つたことでは無い。土着民で主として都市周辺地区に合法的に土地を占有しているものであつても、大多数は貧困な状況にあるので住居は荒廃し、その人口密度は都心に位置する中国人、印度人街程ではないが、同様に教育、衛生の見地からも環境は不健全で問題が多い。

植民都市の時代からスクワッターはあつたが、戦後都市の急速な拡大の過程で、スクワッター人口は急速に増加して、アジア都市は危機的状況に見舞われ、都市に於ける最も重要な問題となつた。

ホルンスタイナーによれば、一九六〇年―七六年のフィリッピン全人口の増加率は三・四％であつたが、都市人口は六・七％と二倍の早さで増加した。出生率は都市では農村より低いが、都市の人口増加は流入によるのみでなく自然増にもよるのである。一九六〇年に全人口の一八・三二％が都市人口であつたが、一九七〇年には三二・七九％となり、人口の三分の一は都市居住人口であつた。マニラ都市圏は、一九六〇年都市人口の三三％であつたが、一九七〇年には三六％となり、此の一〇年間のフィリッピンの都市人口の増大は主にマニラ大都市圏の拡大によるのである。しかも一九六五年から七二年の間のマニラ大都市圏の失業率は一一・二％であつて、全国人口の失業率五・二％の二倍以上である。かくて都市の拡大は貧困地域の増大であつて、スラムやスクワッター地域の拡大の過程であつた。[68]

マニラに於ては一九六六年人口急増の結果社会組織の機能が麻痺する状態にまでなつた。一年の間、七〇％の地域に水道

の規則的な供給は無く、ごみは街に山をなし、電灯は充分につかず、郵便の配達、警察、消防も頼りにならず、交通は渋滞して人々は歩行距離から出ることが困難になつた。[69] 都市的なサービス機能の麻痺のみでなく、住宅の供給は間に合わず、スクワッター人口の増加の割合は都市人口の増加の割合を上廻つた。

発展途上国の最近の都市化は人類の歴史上未曽有の速度で進んだが、スクワッター人口は何れの都市でも多くを占めた。アジアの一九六〇―七〇年に於けるスクワッター人口の各都市人口に対する割合はカルカッタ三三％（一九六一）、タイペイ二八％（一九六六）、ジャカルタ二五％（一九六一）、クアラルンプール二五％（一九六〇）、シンガポール一五％（一九六〇）、香港一一％（一九七一）という状態であつた。[70] 更に注目すべきは急速に増大しつつある都市人口より、一般に早い速度でスクワッター数が増加していることであり、多くの国では大都市のみならず小都市を含んでスクワッターは都市の主要な生活様式となりつつあることである。

スクワッター人口の割合の最も多いのは都市周辺地域であるが、彼等が占拠する位置に関する単純な説明は可能ではない。先ず彼等は使用されていない土地を占拠しようとするので、何処に空地があり、何れが彼等の占拠し得る土地であるかということに関する情報によつて、スクワッターの占拠する土地がきまる。

先進工業国では都市拡大の過程で都心の統合機関の規模は拡大し、其の数を増加して隣接地域に侵入し、都心居住人口は都市周辺に移るから都心は夜間人口を喪失する反面、周辺の人口増加率が高まり、機関の侵入を受けつゝある隣接地域は荒廃した状況になり、流入する貧困な移民の居住地となつてスラム化する。[71][72] 東南アジアの諸都市の変化の過程はいくつかの点で此れと異なつている。

東南アジアの大都市に於て都市や周辺にスクワッター人口の多いことは都心附近の人口が離心し周辺に移るためではない。大多数の都市人口が貧困であつて交通費を支払う余裕が無く、アジアの社会経済文化的な条件の下で、仕事に便で、自

己の社会組織を維持し、生活を安定するために、都心附近の人口は元来住んでいたこの土地を西欧都市に比較して遙に高密度であつても最大限に利用して止つている一方、農村から来住して来た人口は都心附近に入り込めず周辺に居住することになるから、農村から都市に向つての人口の移動が多い程、都心附近の人口増加率が高くなるのではなくて、周辺の人口の増加率が高くなり、此等来住人口はスクワッターになる人口であるから周辺にスクワッター人口が多くなるのである。

実際に都心附近に植民都市時代から住んでいるのは中国人であり、彼等は中国人街を構成していた。しかし都市が成長するにつれて都心のオフィスが増加拡大し、此の地は政府や企業に買いとられ、再開発されて、即ち都心の拡大による周辺への侵入（invasion）が起つて、中国人街の土地は狭くなつたが、中国人の持つ社会組織、文化的伝統、職場と住居の一致、低所得のため、此の地に止まり極めて高い密度で土地を利用し、離心現象は起らない。

また中国人が都心附近の土地を占有しているので、農村から都市に来住した土着人口は都心附近に入り込むことはできない。この現象は一連のシカゴ、ニューヨーク、ボストン等の研究によつて明かにされたような米国の都市に来住した外国移民が、都市の拡大につれて都心の機関の隣接地域への侵入によつて荒廃した都心周辺の所謂遷移地帯（Zone in transition）に最低の家賃地域を見出し此処に居住するに至る現象とは著しく異なつている。(73)

かくて東南アジア都市では、都心附近からしめ出され、また此処に入り込む経済能力もない土着の来住人口はスクワッターとなつて、無料で居住し得るところであれば、都心附近は仕事を得るに最も都合がよく、次に工場や建設工事の現場附近が望ましいが、この附近には広い土地は無いので、市内のあちこちの小さい空地にスクワッターは小集団をなして居住することが多い。そしてまとまつて広い空地を得られるところは図5に示されるように都市周辺に多いから最も大きなまた最も多数のスクワッターの集団は周辺に生ずるのである。

高層の建物の密集している香港では、スクワッターの位置は都心附近では未利用の丘の急斜面、ビルの屋上等であり、最

も多くは都市周辺地域である。バンコックでは最大のスクワッター地域は都心に比較的近く、政府所有で未利用の港湾附近の沼池クロントイ（Klong Toy）であり、マニラでは北港に近く船積の荷役の仕事があり、また中央市場が近くて行商人の機を得やすいトンド（Tondo）に大きいスクワッター地域を生じた。

スクワッターの居住状況は種々であるが、此の現象は主に経済成長の速度に対応しない程戦後の都市農村に亙る人口の急速な自然増と、困窮した農村から溢出した人口が生活の機会を求めて都市に来住した為に生じたのである。従つてスクワッターとなつた人口は都市生活に適応する教育や技術に欠け失業者の割合が多く、就業した場合も極めて低い賃銀で生計を維持するのに困難である。

其の状況は東南アジアに於ても国によつて異なり、シンガポール、香港、クアラルンプールの状況はバンコック、マニラ、ジャカルタの場合よりよいと言えよう、シンガポールと香港の経済成長に就ては既に若干述べ、また香港の低所得層の住居問題に関しては筆者は別の機会に述べた。(74) 特にバンコック、マニラ、ジャカルタは就業の状況は悪く、失業の状況にある者が昼間も街、特に都心附近を彷徨し、乞食、売春婦のポン引き、立売人、かつぱらいも多い。仕事をしても不安定な臨時雇い、低賃銀であつて期待が満たされず、此等の人口が居住する割合の多いスクワッター地区はしばしば犯罪の発生源とみられ、為政者達は彼等が終には無政府的な群衆となり、都市や国家の秩序を破壊するような政治的脅威になることを恐れている。

スクワッター地区は種々であるが、一〇、〇〇〇の人口を有し、バンコックの最大のスクワッター地域であるクロントイ及びマニラのトンドの状況を述べることにする。バンコックの一般的な住宅事情もシンガポール、香港、クアラルンプールに比較すれば可成り劣つている。広い土地の占拠が可能であつたこともあるが、此れだけ多数の人間が集つたスクワッター地域は、二万の人口を有するマニラのトンドと共に、東南アジア諸都市の中でも少ないであろう。

クロントイのスクワッター地域はチャオプラヤ河（Chao Playa）に臨み港湾局所有の浅い沼状の土地に建てられている。

道路から一メートル程降りた低い土地に、雑木を用いて自力で建てた各戸六畳間程の家がギッシリ詰り、川に沿つて遠くまで無秩序に続いている。家は水深二〇～三〇センチ程のところに建ち、道路と家の間、家と家の間には二〇センチ幅の板がしいてある。この板は小さい杭にしばりつけられて水の表面に位置しているが、歩くたびにぐらぐら動く。家には戸はなく外からのぞけるが床には板が敷かれてあるだけで、僅かの衣服が板壁にかけてあり、家によつて仏壇がある他、ラジオがある程度で家具らしいものは殆ど無い。ガス、電気もなく、石油ランプ、コンロを使うから火災の危険は多い。各戸に便所も無く、大便は数戸に一つ位の溜桶式の便所を使い蝿がむらがつており、小便は家の下の水に流すことが多いようで、黴菌も多数発生していると思われる。此の水の中を子供が水しぶきをあげて走つている。道路の側面の土手のところに恐らく一〇戸に一つ位の割合で共用の水道栓があるのみであり、此処に主婦が集まつて洗濯、炊事等をやつているが、低地であるから汚水を流す水路が無い。此処の衛生状態を示す罹病率、死亡率等の統計は得られないが、其の状況は恐らく極めて悪いと思われる。また家の前の道路に面してタイ独特の幸運をもたらす神である、四角い箱状の神棚が杭の上に釘付けにしてあるところもあり、僅かの菓子や果物が供えてあつた。

政府はスクワッターが何時迄も此処に居据わることを望まないから、施設を整えたりすることはしないし、住民が家を改造して耐久性のあるものに改めることを禁じている。

此の地の中央近くの空地に竹造り平屋二〇坪のコミュニティセンターがあり、外部から来た数人の中年の男女のボランティアーが数十人の小中学校程度の年令の子を集めてボーイスカウトやガールスカウトのような組織をつくり、休日にはスポーツ等を通じての集団訓練や社会奉仕などの行事を行つていた。此の組織は地域住人の数に比して小規模で、此の附近には多数の子供が同年令であつても、関係なく他のことをして遊んでいる。

道路を軸として親戚や同郷のものが集つて住んでいることが多く、相互に外や内での仕事や家事、子供の世話、其他相互

に援助し合つているようで、お互の家に盛に人が出入りしていて近隣性は強い。コミュニティの問題に篤志家が来て相談に乗つたりすることはあるが住民が自分達の希望の実現を計るための組織は無いようである。[75]

一九七〇年タマサト大学が行つた此処の住人の社会的特性に関する調査によると、此の地区の人口の年令は若く、性も均衡がとれて、若い家族よりなり、一四才以下が四八％で子数が多い。戸主の七七％は中央タイ生れ、四分の一はバンコック生れで、近距離からの来住者が多く、彼等の八五％は仕事をみつける目的で来た。現存戸主の九五％は職をもち、各戸の二人は有業である。しかし此のうち六％が製造業に携るのみで他は東南アジア地区の他のスクワッターと同様不安定な建設、輸送、商業に雇われ四分の一は自営業である。このような数字は出ているが、恐らく臨時雇い等で時たま仕事があるのみで常時ある訳ではないものが多いのであろう、平日でもブラブラしている青壮年のものを多数みかける。

彼等の六一％はバンコックで低所得家族とみられる一カ月一五〇〇バーツ程の所得であり、二〇％はそれ以下の所得しかなく極めて貧しい。戸主の半数は一〇年以上クロントイに住み、四分の三は五年以上、六％が一年以下であつて、此の地区にスクワッターとして腰を落ちつけている者が多いことを示している。[76] 彼等はよそに出てゆきたくても出てゆくことがないのか或は此処を安住の地とみて出てゆくことを望まないのかが問題である。

スクワッターの状況を観察する場合、予め我々自身が持つ価値判断即ち貧困、荒廃、サービスの欠除等のみから見ると重要な事実を見逃がす危険がある。ラクイアン(Aprodicio A. Laquian)[77]によれば、居住者にとつて望みのあるスラムであるか絶望のスラムであるかという、居住者自身のコミュニティに対する意識の立場に立つた経験的立場からみることも彼等の行動を知るに必要である。

バンコックのスクワッターのこの側面の調査結果は得られないが、ラクイアンによるマニラに於けるスラムとスクワッターの調査とクロントイの場合を対比しながらスクワッター居住の状況を述べたい。

マニラのスラム居住者及びスクワッターにとつて、都市では農村よりも仕事や子供の教育の機会に恵まれ、家賃は無いか、あつても極めて低廉であるから、貯蓄し、社会的に向上することが出来ると思つている。マニラではコミュニティは伝統的な制度と社会的統制その方式をもつ農村出身の人々から成り、実際に都市の中に存在する村であつて近隣の親密性、強い我々意識、心理的安定によつて特色づけられた基本集団的コミュニティである。

スクワッターやスラムの居住者は如何に貧しくとも、此のコミュニティを去りたいと思つている人は五%以下の少数である。クロントイの近隣が親戚、同郷のものの集りでインフォーマルな相互扶助の組織があり、近隣性が強く、人々が安住し、出てゆくものが少ないのは、これと同一の理由によるのであろう。何れのコミュニティに於ても先進国からの訪問者が考える程自分等が悲惨で不幸な状況にあるとは考えていないようである。

マニラではスクワッターやスラムの住人の間に政治参加は活発で、登記された者の八〇%は投票し、政治的結社に加わるのは普通である。彼等は農村出身者であるが、コミュニティ組織は一般にゆきわたり、経済、政治、社会等の彼等の生活に関係ある問題の時には活発に働く。

バンコックのスクワッターの此の面は不明であるが、マニラのスクワッターはコミュニティに自己一致し、人々は組織を通じて自分達の利益を守り、自分達の置かれている状態を改善してゆこうとする熱意のあることを示している。政党とコミュニティの組織は人々の目的を達成する最善の手段であると考えている。少なくとも此のスラムとスクワッター地域の人々は自らの地域を望みあるスラムと考えているのであろう。

政党や地域組織が人々の願望の発表、実現に道を開く助けとなるなら、抑圧や疎外から来る無政府状況は現れる可能性は少ないし、為政者の恐れている暴動や暴力の手段に訴える必要はないであろう。此処で東南アジア諸国や都市の政治権力のあり方及び、国家の建設計画の方向が問題となる。

西欧先進国では都市問題は地方政府或は地方自治体の問題であり、問題を明かにする為に地域社会や都市権力に関して多くの研究が行われてきた。[78] 東南アジアの都市は国家権力と密接に結びついて発展してきたし、現在も最も重要な都市はプライメイト・シティであつて国家的統合の役割を担つている。東南アジアで国家権力から離れて都市を扱うことは妥当ではない。国政を支配する都市エリートが、元来農村から溢出されて来た都市大衆との間の文化、経済の二重性を克服し、国政や国家計画に、都市大衆の意志を行政のチャネルを通じて如何に反映させてゆくかが、最も重要な課題であるし、より根本的には農村が人口の大多数を占め都市に大量の人口を溢出する根源をなしている。都市と経済文化的に異質の社会をなしている農村の構造の改革を通じて、国家的統合を完成することなしには都市の問題は解決し得ないであろう。

東南アジアの諸大都市の中でシンガポールと香港の住居の状況は他の大都市と異なつている。両市は共にアジアに於ける良港であり、工業の発展はめざましく、輸出は伸長して、他の諸都市のような集散地都市としての寄性都市の性格を克服して、自己の工業製品を輸出する産出都市に転化してきた。

両市は人口の少ない島国であつて、農村或は他国からの人口流入の程度が少ないこと即ち他の都市で問題となる都市と農村の文化経済の二重性から来る問題が少ない。都市を拡大し近代化する主要な機能からみれば、西欧文化を借用した異種混合変容の都市であり、系統発生都市ではないから時には根無し社会（Rootless society）或は文化なき社会と言われるが、狭少な島国で民族的には中国人が圧倒的多数をしめ、国民の生活からみれば、中国文化が全体にゆきわたつており、他の都市の複合都市から生ずる不統合の問題が少なく、政治的に安定している。

一人当りGDP（国内総生産）はアジアでは日本に次で高く、他の都市にみられる所得の著しい格差に比して、此処では格差は未だ大きいが所得の平準化も進み教育も普及しており、国民の都市的状況への適応も容易であり、生活形態に於て他の都市より都市化が進んでいる。

両市にとつて都市と国全体とは同義語であるが、政府の都市問題に対する取り組み方も他の都市と異なり、計画は進んでいる。治安の維持、水道、電気の供給、交通等の各種サービスも効率的に行われ、外観も整然としており、住居に関しては、政府は積極的に大規模な公営住宅を多数建設し、半ば近くの人口を収容して、東南アジア都市計画の模範とみられている。(79)香港に関しては別の機会に述べたので、以下シンガポールのみをとりあげ、都市の問題としての住宅問題を焦点として其の大要を述べることにする。

シンガポールに於ては一九五九年に工業化、公営住宅、人口及び家族画計、及び都市再開発計画を作成し、一九六五年マレーシヤから分離した後、此の計画は一層進捗した。政府は土着資本と外国資本による工場建設を計り、国外から多数の大企業の誘致に成功して、工業化を軌道に乗せ、製造業は大幅な伸びを示し、また観光事業や金融中心としての機能を拡大し、国民生活も急速に上昇した。此の状況の変化に即応して政府は大規模な都市建設計画を進めた。

都市全体の計画は現在の都市の周辺にロンドンの計画にならつてグリーンベルトを造つて都市の無秩序な拡大を防いでいる。増大する人口に対しては、施設、サービス、雇用に関して自足的な工業ニュータウンとしてのジュロン(Jurong)を都市から離れた位置に建設する一方、都心を再開発して居住人口を減じ、道路を拡張して、交通量の緩和をはかり、都市の効率を高めた。即ちマスタープランに現れる基本的な方向は離心現象の促進であつて、伝統的な中国人街の特徴をなす過密、荒廃の状況は大きく改善された。

シンガポールは日本の占領中スクワッターが増加し、戦争終了後避難していた人口が帰還し、また中国や印度からの来住者も増加、更に高出生率も伴つて、都市の住居の過密と不足は急迫を告げた。一九五九年には八四%以上の家族は一部屋住いであり、其の半数は仕切部屋に住んでいる状況であつた。

しかし政府の大規模な建設計画が着々と進められていつた結果、一九七六年には人口二二八万のうち五一%、衛星都市と

含むと六〇％即ち過半数を公営住宅に収容し、シンガポールは計画都市に変貌した。[80]

スラム状の中国人街やスクワッター地域の住人は空間を充分にとつた白やクリーム色の高層公営住宅に入居し、東南アジア独特の青々した樹木や芝の緑にはえてシンガポールは東南アジアの他の都市に比し眼をみはるような美しい街に変貌した。住居の規模は全戸のうち三室が四六％と最も多く、一室が三三％、二室が一六％、五室が二％であつて、[81]居住面積の広さと清潔さ、設備の整つていることに於ては東南アジアでは頭抜けている。

政府の強力な指導下に短期間に見事に進められた都市計画は街の形態を能率的なものにし、またスラム居住者やスクワッターの減少に大きく役立つたが、政府が計画した物的計画が住民の必要とする生活の構造にうまく対応しないことに問題を生じた。これは今迄東南アジアの何れの都市でも経験したことのないむしろ先進国都市の問題であつて、住民のニードを組織化してこの観点から物的計画を作つてゆくことはギャンズ（Habert Gans）主張する様に現代都市計画の最も重要なる課題となつている。[82]

新しい公営住宅の居住者は電気、水道、道路等の最も基本的はものは言う迄も無く、商業施設、コミュニティサービス施設、子供の遊戯場、娯楽設備も整つたが、建築の構造及び住居の割当て方式のために人々を孤立化し、個人化して、基礎集団的な接触に欠け、従来の近隣の相互扶助の組織を失い、コミュニティへの帰属意識に欠ける生活は、中国文化の集団的な様式を基礎に生活してきた人々にとつて満足なものにはならなかつた。

スラムの生活は交通は不便であり、コミュニティや商業サービスの施設に不足し、清掃も不充分で不衛生な環境ではあるが、彼等は中国の伝統的な文化が持つ、基本集団的性格即ち強い家族的紐帯、密接な近隣関係、コミュニティへの強い愛着心を通じて、[83]人々は職業を得て、結婚し、社会秩序が保たれ、人格が形成されて、人々は安心して生活することが出来ている。

政府やこれと協力する物的側面の計画を専門とする計画家は、世界の諸国に於て彼等の物的計画は物的構造と人間の社会的行動との関係について、事実の観察を通じて証明された充分な知識はなくても、周到な注意をもつて作成してあるから、此れを基礎として理想的な社会が出来上ると考えられているかもしれない。此の計画が人々の日常生活を作つている社会システム、社会構造、人々の持つアスピレイションを基礎に作つたもの、即ち物的計画を人々の生活の構造と対応させて作つたものであればこういう問題を生ずることは少ないはずである。

此の問題は、既に筆者が別の論文で稍詳細に論じたので此処では省略するが、[84] 社会は進む程社会の福祉を増進することが社会の目標として強調され物的計画は其の手段であつて目的ではなくなつた。人々が自己のニードを充足し、また発展し、社会の福祉を充実してゆく為には、伝統的な文化と結びつくと共に将来に向つて変動する社会システム、社会構造や人々のアスピレイションを含んだ計画が必要になつており、此の観点から事実に関する調査を基礎に物的計画が作成されなければならない状況になつている。この経験と問題解決のための計画の手続きをへて新たな計画を実現するならば、都市計画の未だ充分進んでいない東南アジアの他の諸都市に対しても、条件に若干の相異があつてもこれからの都市計画のための重要な指針となるであろう。

V あとがき

以上をもつてプライメイト・シティを焦点とする東南アジアの都市化、近代化の一般的な記述を終つた。此の記述は言う迄もなく此等すべての問題を尽そうとするのではなく、特に重要であると考えられる側面に限つている。其の若干の問題を要約してむすびとしたい。

此の論述の焦点はいくつかあるが、先ず都市を変動する国際秩序の変化との関連に於て発展途上国の都市を歴史的変化の

過程からみたことである。

東南アジアの諸都市は、先進工業国と接触する以前に、土着文化をもつた相対的に封鎖的な帝国の統合中心として系統発生的変容都市として生じた。此等諸国が先進国の植民地運動に巻きこまれる過程で、此処に植民帝国の拠点都市が建設され、此の都市は国際社会の派生体としての構造をもつ異種混合的変容及び寄生都市となつた。戦後、国家の独立と共に系統発生都市、産出都市たることを求められたが、諸国の相互関係、国際的分業が強まるなかで、此等の諸国は先進資本主義国に対し発展途上国に位置し、プライメイト・シティは植民都市の遺制を有しながら国家の統合中心として発展が計られたが、先進国との格差は拡大して南北関係が悪化し、先進工業国の経済協力、技術援助が行われることになつた。

東南アジアの都市構造の変化を解明するには歴史的に変化する国際的分業体系に於ける途上国の位置の変化からみてゆくことが必要である。従つて途上国の都市化、近代化の過程は、内在的に都市化、近代化をなしとげた西欧先進工業国の辿つたと同一路線を進むと考える社会進化の理論は、重要な面で途上国にあてはまらず、途上国の変化は自身の伝統的な社会文化構造と結びついた先進工業国との関係を含めて解明されなければならない。従つて異種の社会の変化を含んだ複数路線の社会進化の理論の発展を要する。

東南アジアのプライメイト・シティは先進工業国の植民地首都として建設され、独立後も国の国際社会における位置によつて構造が変化してきた。これまでの都市研究に於ては、都市は独立的実体或は都市と農村との関係からみられることが多かつたが、我々のプライメイト・シティの研究では国際社会との関係及び一定の国家体制の統合中心としてのより大なる社会の派生体であつて、プライメイト・シティは体制構造の変化につれて変化し、再構成されていることを知つた。アメリカの主要な都市理論にみられる社会解体からの観察は都市の変化を同一体制内の直線的な変化の過程とみる静態的な見地に立つているのであつて、都市の部分的な現象の説明に止つていると言えよう。

プライメイト・シティの立地に関しては、各時代を通じて都市の中核をなす統合機関の統合範囲に対して技術を媒介として近接性を有する位置に植民地時代は権力的に建設され、独立後も歴史的惰勢を有する位置として此処に止つた。プライメイト・シティのみが都市として発展し他の都市の発展を妨げた理由は植民帝国が権力的に都市機能を独占し此処に集中したことに源を発している。一度建設されると、広範囲な地域に対し技術とからんだ高い近接性を有する唯一の位置として、集中した統合機関の相互関連の必要及び土地の持つ威信のために変化を生じなかつた。

都市の盛衰と構造の変化は国家体制の派生体として各種統合機関の目的達成の可能性によるのであつて、統合機関は都市の構造と変化を直接に決定する。都市の就業人口は各種統合機関に地位と役割と権力、報酬を得て統合機関の目的逐行のために活動するから、統合機関は都市人口、社会階層と消費生活の型に関連する。

植民地の拠点都市としてのプライメイト・シティは寄生的であり産出的でないから、植民帝国の西欧式の政治経済的な支配機関を除いては規模が小さく、其の数は少なく、従つて都市の規模は小さかつた。独立後、都市が産出都市としての性格を強めるにつれて、統合機関の数の増大、規模の拡大があつたが、都市、農村に亙る人口の増加及び農村から都市への人口流入はこれを遙かに上廻つたので、プライメイト・シティの人口は急速に増大し、潜在的失業及び失業の多くの人口をかゝえ、都市の財政は必要なサービスを提供し得ず、生活環境を悪化した。

大なる統合機関が少ないことは、西欧化した少数の上層、中間層の人口に対し土着文化をもつた多数の貧しい下層人口と言う二重構造の状況を現出し、また経済的に優位に立つ外国からの民族を含んだプライメイト・シティでは、民族社会内部の相互扶助組織を持つ封鎖的な機関を構成し、都市は伝統を解体すると言う西欧の都市理論に反して、文化構造が容易に変化しない複合社会をなし、独立国家としての全体の統合が困難になる。此の状況下で国家的統合を導くには都市農村に亙つて均衡のとれた経済発展の基盤の上に国民の合意を基礎とする政治の確立が必要である。

都市内部に於ける各種コミュニティの分布構造は、都市形成の基本となる主要な統合機関を支配の中心とし、これへの近接性によつてコミュニティ構造が異なり各々は相互に関連して有機的全体をなしていることは先進工業国の大都市と同様である。たゞし西欧大都市では都心の拡大につれて都心周辺の高所得層は離心し、新たに流入した人口が此処に定着して低所得居住地或はスラムを形成するが、プライメイト・シティでは此れとは逆に独立後も都心隣接の伝統的な威信の地域に高所得層が居住し、また植民地時代に流入した民族集団が其の持つ文化的価値の故に定着し続け、新たに流入した土着人口の多くはスラム或はスクワッター地域を形成して都市周辺に位置し農村と類似の近隣関係をもつて居住する。競争を原理とする先進工業国大都市とは形態の相異のみでなく、都市的環境にあつてもパーソナルな関係を保持する意味で異なつている。しかしこれは分かち合う貧困の脱し得ない側面の一つを示すものともいえよう。

以上この論文の持つ理論的な意味を限られた紙数の中に要約した。此の論文は不充分なものであるが、此の論文を含む一連の研究を行うにあたつて、東南アジア各都市の現地を視察し、各国の政府や市及び各地大学のスタッフの方々と面接し、資料を受領し、各都市の上中下の各層の人々を訪問、質疑応答を行う等、多くの人々に一方ならぬ御世話になつた。

私は昭和五〇年から五一年までの一年間、国際交流基金の訪問教授として香港中文大学に滞在の間、中文大学、香港大学、香港政府の方々から多くの助言を得たし、現地視察を助けて頂いた。

また昭和五二年慶應義塾福沢基金、吉田国際教育財団の研究補助を得て、東南アジア諸都市の研究視察旅行を行い得たが、其の間バンコックのエカフェのスタッフの方々はじめ、各国政府の方々、大学のスタッフ等此処にあげきれない多くの方々の教示を得たし、現地を視察し、人々と面接する機会を与えられた。また五六年には中文大学に招かれて東南アジア都市問題を論じ多くを学び得たことを心から感謝したい。

此処に発表したのは其の結果の一部であるが、此の研究が都市研究の方法、都市理論の構成に新しいものを加え、また発

展途上国及び其の都市の事実を認識するに役立つなら幸である。

(1) United Nations, Declaration of Principles, Vancouver Declaration in Human Settlemens, June 1976.

(2) Janet Abu-Lughod and Richard Hay, Jr., ed., The Third World Urbanization, Introduction, Methuen, Inc., 1979.

(3) Jurian Steward, Theory of Culture Change, University Illinois Press, 1955.

(4) Leonard Reisman, The Urban Process: Cities in Industrial Societies, Free Press of Glencoe, 1964.

(5) P. Weatley, Desultory Remarks on the Ancient History of Malay Peninsular, in J. Bastin & R. Roomink (ed.) Malayan and Indonesian Studies, Oxford, 1964, p, 42-3.

(6) N. Keyfitz, The Ecology of Indonesian Cities, Ameiran Journal of Sociology 66, 1961.

(7) Robert Redfield and Milton Singer, The Cultural Role of Cities, Economic Development and Cultural Change, 353-73, 1954.

(8) T. G. McGee, The South East Asian City, A Social Geography of the Primate Cities of South East Asia, Frederick A. Praeger, 1967, p. 40.

(9) G. Coedes, Pour mieux comprender Angkor, Paris, 1947, p. 139.

(10) R. Redfield and M. Singer, op. cit.

(11) T. G. McGee, op. cit., pp. 34-5.

(12) Rhoad Murrey, Traditionalism and Colonialism, Journal of Asian Studies 29, 67-84, 1962.

(13) R. Redfied and M. Singer, op. cit.

(14) R. Murrey, op. cit.

(15) Mark Jefferson, The Law of the Primate City, Geographical Review Vol. 29, 1939.

(16) Walter Christaller, Die zentralen Orte in Suddeutschland Jena! Gustone Fischer, Verlag, 1933 クリスタラー著、矢崎武夫監訳『都市社会人間生態学』時潮社、一九八〇年、一二七六頁。

(17) Population Division United Nations Bureau of Social Affairs, World Urbanization Trends, 1920-1960., in G. Breese (ed.), The City in Newly Developing Countries, Princeton Univercity Press, 1960.

(18) Arnold S. Linsky, Some Generalizations Cencerning Primate City, in G. Breese (ed.), The City in Newly Developing Countries, Princeton University Press, 1966.

(19) Cliford Geertz, Peddlers and Princes, Social Change and Economic Modernization in Two Indonesian Towns, 1963, p. 20.

(20) W. F. Wertheim, East West Paralles, Sociological Approach to Modern Asia, Chicago, Quandrangle Books, 1914, pp. 165–81.

(21) R. Redfield and M. Singer, op. cit.

(22) B. F. Hoselitz, Generative and Parastic Cities, Economic Development and Cultural Change 3, 1955.

(23) P. M. Hauser, World and Asian Urbanization in Relation to Economic Development and Culutral Change, Hauser(ed.), Urbanization in Asia and the Far East, Culcutta: UNESCO, 1957.

(24) T. G. McGee, op. cit., p. 63–65 此の部分は自らの観察、住民への質問によること多く、マッギーの記述は参考とした。

(25) André Gunder Frank, Sociology of Development and Underdevelopment of Sociology, Catalyst 3, Summer 1967.

(26) Gerald Breese(ed.), The City in Newly Developing Countries, Englewood Cliff, New Jersey, 1968.

(27) Norten Ginsburg, The Great City in South East Asia , American Journal of Sociology Vol. 60, 1955.

(28) K. Davis & H. H. Golden, Urbanization and the Development of Pre-industrial Areas, Economic Development and Cultural Change 3, 6–26, 1954.

(29) United Nations, The Population of South East Asia (Including Ceylon and China-Taiwan) 1950–1980, Future Population Estimate by Sex and Age, New York, 1958, p. 47.

(30) William Skinner, Chinese Society in Thailand, An Analytical History, Ithaca, New York, 1957, pp. 306–10.

(31) Leando A. Viloria, The Manileons: Significant Eletes in Urban Development and Nation Building in the Philippines, in D. J. Dwyer ed., The City As a Center of Change in Asia, Hong Kong University Press, 1972.

(32) Mary R. Hollnsteiner, Becoming An Urbanite : Neighborhood As a Learning Environment, in D. J. Dwyer(ed), The City As a Center of Change in Asia, Hong Kong University Press, 1972.

(33) L. Wirth, Urbanism as a Way of Life, American Journal of Sociolgy, 44, July 1938 高橋勇悦訳「生活様式としてのアーバニズム」鈴木広編『都市化の社会学』誠信書房。

(34) 矢崎武夫「発展途上国の都市問題―香港低所得層の住宅問題を事例として―」法学研究第五三巻九号。

(35) Wilbert Moor, Social Change, Englewood Cliffs, N. J. Prentice Hall, 1963, p. 112. 松原洋三訳『社会変動』至誠堂。

(36) Leonard Reisman, The Urban Process: Cities in Industrial Societies, The Free Press of Glencoe, 1964. 星野郁美訳『新しい都市理論』鹿島出版会、一六四―一五一頁。

(37) André Gunder Frank, op. cit.

(38) Alejandro Portes, Modernity and Developoment : A Critique, in Studies in Comparative International Development 8 (Fall), 1973.

(39) Francisco Benet, Sociology Uncertain: The Ideology of Rural-Urban Continium, Comparative studies in Society and History Vol. I, October, 1963.

(40) L. Wirth, op. cit.

(41) Robert Redfield, Folk Society, American Journal of Sociology, Jan. 1947.

(42) Takeo Yazaki, Social Change and the City in Japan, Japan Publications Inc. 1959. 矢崎武夫『日本都市の発展過程』弘文堂、一九五九年。

(43) Julian Steward, The Theory of Culture Change, Illinois University Press, 1955 p. 53.

(44) Oscar Louis, Life in a Mexican Village, Tepoztlan Revisited, 1955, p. 53.

(45) F. Benet, op. cit.

(46) Gideon Sjoburg, Cities in Developing and Industrial Societies, in P. M. Hauser and L. F. Schnore, The Study of Urbanization, John Wiley & Sons Inc., 1967.

(47) A. Frank, op. cit.

(48) Philip M. Hauser, Observation on the Urban-Folk and Urban-Rural Dicotomie as Forms of Western Ethnocentrism, in P. M. Haunser and L. F. Schnore, The Study of Urbanization, John Wiley & Sons Inc., New York 1967.

(49) P. M. Houser, Urbanization in Asia and the Far East , Tensions and Technology Series, UNESCO, Calcutta.

(50) Rhoods Murphey, New Capitals of Asia, Economic Development and Cultural Change, V, 1957.

(51) T. G. McGee, op. cit.

(52) A Laquian, The Asian City and Political Process, D. T. Dwyer(ed.), The City as a Center of Change in Asia, Hong Kong University Press, 1972.

(53) E. W. Burgess, The Growth of the City, An Introduction to a Reseach Project, Proceedings of the American Sociological Society, XVIII (1923): pp. 85-89. バーヂェス著、奥田道夫訳「都市の発展」、鈴木広編『都市化の社会学』誠信書房。大道安次郎・倉田和四生訳『都市』鹿島出版会。

(54) Chaney D. Harris and Edward Ullman, The Nature of Cites, in Paul Hatt and Albert Reiss, Cities and Societies, The Free Press, 1957 p. 243.

(55) 矢崎武夫「東京の生態的形態」『都市社会学研究』金文堂、一九五四年。

(56) R. E. Park and E. W. Burgess, Introduction to the Science of Sociology, University of Chicago Press, 1924.

(57) E. W. Burgess, op. cit.

(58) Chancy P. Harris and Edward Ullman, op. cit.

(59) Gideon Sjoburg, Comparative Urban Sociology, R. E. Merton(ed.), Sociology Today, Macgrow Hill, 1959.

(60) C. P. Lo, Typology of Hong Kong Census District : A Study in Urban Struecture, Y. M. Yeung and C. P. Lo ed., Changing South East Asian Cities : Reading on Urbanization, Oxford Universty Press, 1977.

(61) B. J. Robson, Urban Analysis : A Study of City Structure With Special Reference to Sunderland, Cambridge, 1967.

(62) 矢崎武夫、前掲論文。

(63) Norton Ginsburg, The Great City in South East Asia, American Journal of Sociology Vol 60, 1955.

(64) 会社型経済とバザール経済の問題はさきにあげた Clifford Geerts, Peddlers and Princes ; Social Change and Economic Modernization in Two Indonesian Towns の中で論じ発展途上国の経済変動の態様を示す重要な研究であり、McGee は The Urban Process in The Third World, Bell & Sons 1971 及び Hawkers in Selected Asian Cities : A Report on a Visit to Bangkok, Kualalumpur, Singapore, Bandung and Djakarta, Center of Asian Stndies, University Hong Kong の中で此の問題、を更に東南アジア各都市に亙って敷衍しているが頁数の関係で此処では省略する。

(65) C. P. Lo, op. cit.

(66) Mary R. Hollnsteiner, The Urbanization of Metropolitan Manila, Y. M. Yeung and C. P. Lo ed., Changing South East Asian Cities, Readings on Urbanization, Oxford University Press, 1976.

(67) Jane Jacobs, The Death and Life of Great American Cities, Random House 1961.

(68) Mary Hollnsteiner, The Face of Poverty : Inplications for Urban Development. 女史より直接交付された論文掲載誌など不明。

(69) D. J. Dowyer, People and Housing in Third World Cities, Perspectires on the Problem of Spontanious Settlements, Longman, 1975, p. 10.

(70) U. N. General Assembly, Housing, Building and Planning : Problems and Priorities in Human Settlements, Report of the Secretary-General, August 1970, Annex Ⅲ, p. 55.

(71) E. W. Bugess, op. cit.

(72) Edgar H. Hoover and Raymond Vernon, Anatomy of a Metropolis, Harvard University Press, 1947, Beacon Hill.

(73) W. Zorbaugh, The Gold Coast and the Slum, University of Chicago Press, 1929. Louis Wirth, The Ghetto, University of Chicago Press, 1928. Walter Firey, Land Use in Central Boston, Harverd Univerity Press, 1947. Clifford Shaw & Henry D. McKay, Social Factors in Jevenile Dlinquency, Report on the Causes of Crine Vol. Ⅱ, U. S. Governmets Printing Office, 1931.

(74) 矢崎武夫、前掲論文。

(75) D. J. Dwyer, op. cit., p. 45.

(76) D. J. Dwyer, op. cit., p. 46.

(77) Aprodico A. Laquian, op. cit.

(78) Wright Mills, The Power Elete, Oxford University Press, 1956. 綿貫信成・綿貫譲治訳『パワー・エリート』(東京大学出版会)における如く、国家レベルの権力のあり方と異なって地域社会レベルで権力を扱った代表的なものは、Floyd Hunter, Community Power Structure, A Study of Decision Maker, Noth Carolina University Press, 1953. Robert A. Dahl, Who Governs? Yale University Press, 1961. John Walter, Subsitant and Artifact, Current Status ofResarch on Community Power Structure, American Journal of Sociology Ⅱ 1. Jan, 1961 等であろう。

(79) D. J. Dwyer, Attitudes Towards Spontanious Settlement in Third World Cities, D. J. Dwyer (ed.), The City in The Third World, The Pitman Press, 1974 の中で、香港都市計画の優位性を述べている。

(80) Peter S. J. Chen and Tai Ching Ling, Social Ecology of Singapore, Federal Publications, Singapore, 1977, pp. 3-4.

(81) Peter S. J. Chen and Tai Ching Ling, op. cit., p. 19.

(82) Hebert Gans, People and Plans, Essays on Urban Problems and Solutions, Pelican Book : London 1972, Preface.

(83) Peter S. J. Chen and Tai Ching Ling, op. cit., p. 9

(84) 矢崎武夫、前掲論文。